

神戸市看護大学

いちかんダイバーシティ看護開発センター

ICHIKAN NURSING DEVELOPMENT CENTER FOR DIVERSITY

2024 年度 実績報告書



ご挨拶

神戸市看護大学 学長

江川 幸二

いちかんダイバーシティ看護開発センター（以下、本センター）は、日本学術会議が提唱する地元創成看護学の実装を目指し、多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民や行政等と協働して地域の健康課題の解決に取り組むことを目的に、2021年4月に開設されました。

本センターは4年目を迎えましたが、各グループの積極的かつ継続的な活動については、本報告書の内容をご覧くださいと思います。本センターが取り組んでいる地域貢献活動は、教育・研究と同様に高等教育機関である大学の使命です。神戸市が設置団体である本学は、神戸市民への貢献が求められますが、大学としては、神戸市というローカルな地域貢献のみでなく、その成果をグローバルに発信し、国際的なネットワークを構築していく必要があります。

そのために、2024年度には新たに台湾の台北護理健康大学とMOU（学術交流協定）を締結しました。これまでの米国のワシントン大学や、ベトナムのダナン大学に次いで3校目の協定校となります。また英国のダービー大学とのMOU締結に向けた話し合いも進められ、2025年度にはMOUを締結する予定になっています。このように、国際的な学術交流のネットワーク体制も少しずつですが確立してきているところです。今後はこうしたネットワークを通じて、ローカルに培ってきたことを、グローバルに発信していきたいと考えています。

本センターは2025年4月より、実施してきた事業は継続的に行いつつ組織を再編し、公立大学法人の使命である教育・研究・地域貢献をさらに一体的に発展させ、センター機能のさらなる拡大を意図して、地域貢献部門、教育開発部門、研究開発部門の3部門を創設し、名称も「いちかん看護開発センター」に変更することになりました。またグループ制を廃止し、全教職員が本センターの活動に参加できるようにすることで、より全学的な取り組みを目指します。

新たな体制が十全に機能するようになるには、時間もかかると思いますが、今後も地域に根ざした公立大学法人として、継続的かつ積極的に地域貢献をおこない、それを教育・研究と結び付けて地域の健康課題の解決に寄与して参りたいと考えております。関係者の皆様におかれましては、今後とも引き続き本センターの取り組みに関しまして忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。

刊行によせて

神戸市看護大学
いちかんダイバシティー看護開発センター長

岩本 里織

いちかんダイバシティー看護開発センター（以下、センター）は、2021年4月に開設し、5年が経過いたしました。教職員のご活躍のおかげをもちまして、センターにおける地域貢献活動は、非常に活発な活動が展開されており、学内外から評価のお声をいただき、うれしく思います。

さて、2024年度の活動において、特筆することの一つは、「阪神・淡路大震災30年記念シンポジウム」の開催です。「災害にいきる“看護のチカラ”」をテーマに阪神・淡路大震災において看護師や保健師と活躍された方々による災害における看護の力や看護の発展についてディスカッションをいただきました。また、特別プログラムとして声優の林原めぐみ氏を迎え「看護はみんなのハートフルステーション」をテーマに対談をしていただきました。これにより非常に多くの若い方々にご参加いただき、神戸市看護大学を知っていただいたと共に、看護の魅力や災害時の看護の役割についても考える機会となったのではないかと感じております。

二つ目は、「映画“じょっぱり”上映会」です。一昨年に、山路ふみこ映画財団と共催をさせていただき映画上映会を開催した際に、地域住民の皆様から継続してほしいというご要望をたくさん寄せられておりました。そこで日ごろお世話になっております地域住民の方々、授業や実習などでお世話になっております教育・実習ボランティアの皆様にお礼をかねて楽しんでいただくこと、また学生たちにさらに看護の魅力に触れてほしいと思い、本映画の上映をいたしました。沢山の住民の皆様にお越しいただきまして、盛大に終了いたしました。

最後に、「大学年神戸産学プラットフォーム」への連携事業として、「リカレント教育プロジェクト」「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」「高齢社会を支える医療・介護事業の経営持続性と発展性を担う人材の育成」の3つのプロジェクトに参画し、他大学や企業と共同しながら活発に活動の推進をしていただいております。

以上ご紹介しました以外にもセンターにおいては、非常に多岐にわたる活動を展開しております。今後も、地域住民の皆様や、地域の保健医療に従事していらっしゃる専門職の皆様との共働を通して、本センターが核とする「地元創成」に向けて、活動していきたいと存じます。引き続き、みなさま方のご協力およびご指導をお願い申し上げます。

目 次

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要	1
いちかんダイバーシティ看護開発センターの活動	6
I 阪神・淡路大震災 30 年シンポジウム「災害にいきる“看護のチカラ”	7
II 大邱保健大学からの視察・交流会報告	10
III 映画上映会「じょっぱり～看護の人 花田ミキ～」開催報告	11
IV まちの保健室	14
V 防災減災支援グループ	22
VI 在宅ケア支援グループ	26
VII オンライン看護相談グループ	37
VIII リカレント/臨床連携グループ	43
IX 国際交流グループ	45
X 保健師キャリア支援センターグループ	48
XI コラボカフェ	55
XII トライやるウィーク	61
XIII 分野別の地域貢献活動	63
XVI コラボ教育（教務委員会）	69
業績一覧	74
センターの組織	76



いちかんだ이버シティ 看護開発センターの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要

1. 本センター設置の趣旨

我が国では、人口減少、少子高齢化が進行中であり、2040 年に高齢者人口がピークを迎える。2040 年を展望し、誰もがより長く元気に活躍できる社会の実現を目指して、住民の「健康寿命の延伸」と「多様な就労・社会参加」とともに、「医療・福祉サービスの改革による生産性の向上」への取り組みが必要とされている。本センターは、このように多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組み、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与することをめざして設立した。

2. 沿革

神戸市看護大学は、阪神淡路大震災発災後 1 年後の 1996 年に開学し、兵庫県及び神戸市の復旧・復興とともに歩んできた歴史を持つ。2006 年度の文部科学省現代 GP の助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に始まり、現在に至るまで地域に根ざした教育・研究・地域連携活動を行ってきた。

2009 年度に、地域社会における健康支援の推進と、教育・研究における地域との交流を発展させることを目的として、「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」が開設された。2012 年度には、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を全学的に展開した。さらに、2013 年度には、文部科学省の拠点事業である地（知）の拠点整備事業（Center of Community:以下 COC 事業）で、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」に取り組み、2014 年度に、地域連携教育・研究センターが開設され、西区を中心に地域貢献活動を継続し、地域住民との交流、健康増進活動等を行ってきた。

これまでの取り組みを発展させ、2021 年 4 月にいちかんダイバーシティ看護開発センターが開設された。尚、これまでの地域連携・教育研究センターの活動は、いちかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行っている。

2006 年～	文部科学省の現代 GP「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の助成を受けた事業の実施（～2008 年度）
2009 年	健康支援地域連携センターの開設
2012 年	健康支援地域連携センターが、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を展開
2013 年	COC 事業における「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」への取り組み（～2017 年度）
2014 年	地域連携教育・研究センターの開設
2021 年	いちかんダイバーシティ看護開発センターの開設

3. 理念

本センターは、年齢、性別、人種、国籍、宗教、価値観、ライフスタイルなどが異なる人々が共に生きる地域社会の中で、一人ひとりの生存、生活、尊厳を尊重し、個人と、個人が集まってつくるコミュニティの持つ豊かな可能性を実現することを目指す。そして、センターおよび本学では、日本学術会議で提案されている地元創成看護学の実装を目指している。センターでは、地域連携、生涯教育、国際交流、及び産官学連携、防災・減災支援を5つの柱として、多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組む（図1. センター概念図）。そして、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与する。さらに、地元住民に加え、専門職、自治体、関係機関（職能団体や民間企業）と共にこれらの分野の課題解決に取り組む。コミュニティとの協働を通じ、新たな知見を得て、ローカルに働きかけた経験を蓄積する。そして、この知見をグローバルに展開し、国際的な人・文化交流ネットワークの拠点を構築する。

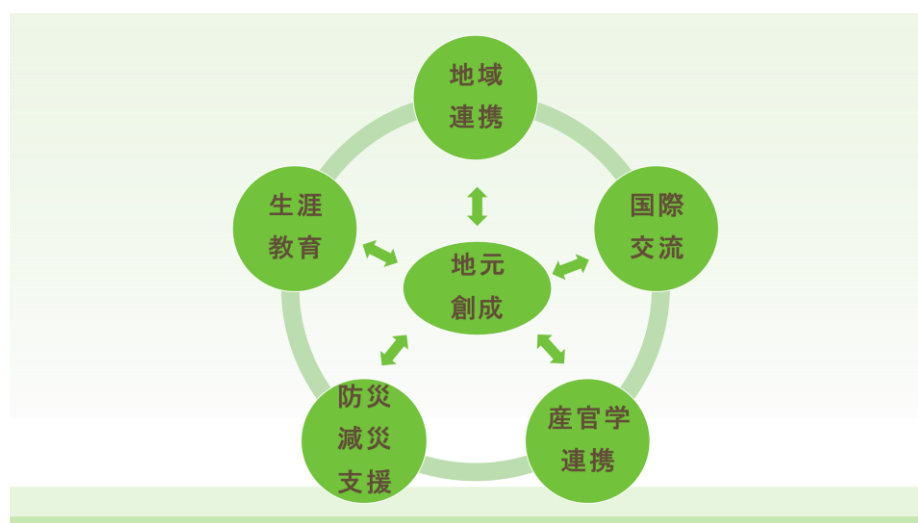


図1 いちかんダイバーシティ看護開発センターの概念図

4. 目標

本センターでは、神戸市を中心としながら、兵庫県下の様々な地域を地元ととらえ、公立大学法人として、教育研究活動の成果を地域社会に還元することを目標とする。

(1) 地域課題の解決や健康創造都市戦略等を担う学術研究の推進

神戸市と地域の抱える保健・医療・福祉分野の様々な政策課題に対して、産官学連携の強化を図り、課題解決に資する研究に取り組む。そして、国内外に向けて研究成果を発信し、各分野の学術的発展に貢献するとともに、政策提言等により、健康寿命の延伸、健康格差の縮小を目指す健康創造都市戦略の一翼を担い、保健・医療・福祉施策の充実に寄与する。

(2) 市民との連携・交流による地域の保健医療への貢献

地域と連携した教育研究活動として、企業、市民、市内の大学、神戸市民病院群をはじめとする医療機関、福祉施設等と連携した教育研究活動、地域貢献活動を推進するとともに、その成果を積極的に市民へ還元する。そして、市民に信頼され、貢献できる大学として、公開講座等の実施、大学施設の開放等を行うことにより、市民の生涯学習に寄与し、市民との交流を促進する。さらに、地域の看護人材の供給のために、看護職者の就業継続支援や復職支援、新たな学びのニーズに対応したリカレント教育を充実させ、看護職者の生涯学習の拠点としての役割を果たす。

(3) 国際都市神戸にある大学として、学生の異文化理解の推進と海外の大学との交流の推進

多様な価値観や文化的背景、生活習慣等に配慮できる国際的な感覚を有した人材育成を行うことを目指す。異文化への理解やグローバルな視点と感覚を培うため、海外研修による異文化体験や地域で暮らす在日外国人との交流、外国の大学との国際交流を推進する。さらに、グローバルな視点を培う国際交流の推進のため、海外からの留学生の受入れを推進するとともに、国際化が進む保健・医療・福祉分野において、医療介護分野等で働く外国人のキャリア開発を支援する。

5. 位置づけ

いちかんダイバーシティ看護開発センターは、センター長及び副センター長のもと、地域連携、生涯教育、国際交流、産官学連携、防災・減災支援という大きな5つの柱を掲げ、開設時は、8つのグループ事業（地域連携、健康支援、在宅ケア支援、国際交流、保健師キャリア支援センター、地域保健支援、臨床看護連携、災害看護）を展開した。2023年度は、リカレント教育を加えた9つのグループ事業を展開した。そして、2024年度はグループ組織編成を行い、地域貢献事業5グループ（まちの保健室、防災減災支援、オンライン看護相談、オンライン慢性疾患管理、フットケア）、生涯教育事業3グループ（リカレント/臨床連携、在宅ケア支援、保健師キャリア支援）、国際交流1グループ（国際交流）の9つのグループで事業を展開した。各グループの活動はプロジェクト型とし、各グループにリ

ーダーを配置して、本学教員が参画し、全学協働で行っている。

公立大学法人 神戸市看護大学 組織図（2024 年度）

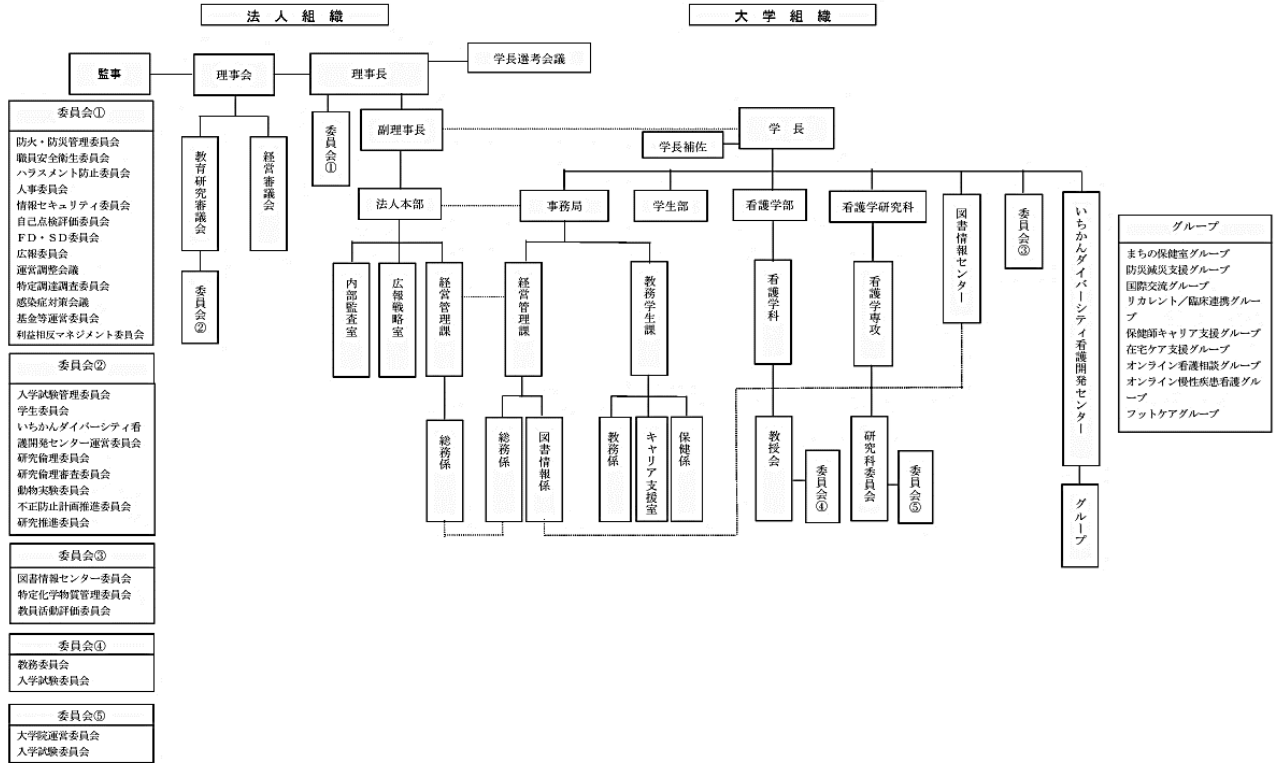


図 2 いちかんダイバーシティ看護開発センターの位置づけ



いちかんだ이버シティ 看護開発センターの活動

I 阪神・淡路大震災 30 年シンポジウム

「災害にいきる“看護のチカラ”」

事務局長 永田章彦

1. 事業概要・経過

2025 年 2 月 2 日(日)に神戸市看護大学ホールにおいて、神戸市看護大学及び神戸市主催の阪神・淡路大震災 30 年シンポジウムを開催した。

阪神・淡路大震災から 2025 年 1 月で 30 年となる。本学は、震災の苦しい悲惨な経験から、十分な医療・看護の体制が必要という切実な要請を受けて誕生したことが礎となっていることより、本学と神戸市とが主催者となり、本シンポジウムを開催することとなった。今回のシンポジウムでは、看護職を目指す学生や中・高校生、医療関係者、一般の方々と対象をひろくして、「災害にいきる看護のチカラ」をテーマに、ラジオ番組の公開収録とシンポジウムの 2 部構成の魅力あるプログラムとなるよう企画した。

第 1 部では、看護や神戸にゆかりのある声優、歌手、ラジオ DJ、作詞家、エッセイストとして幅広く活躍されている、林原めぐみ氏にゲスト出演していただいた。林原氏は、看護師の資格を有し、阪神・淡路大震災当時担当していたラジオ番組「林原めぐみのハートフルステーション」(ラジオ関西)において、毎週、被災者・リスナーを励まし続けたことで知られている。その後も継続して被災地・神戸に特別の思いをもって活動されていることから、看護や大震災、神戸への思いを、若者・医療関係者などに向けてのエールとして発信するうえで適任者であった。

また、現在林原めぐみ氏がパーソナリティを務める番組を、ラジオ関西が放送していることから、ラジオ関西に業務委託し、シンポジウムの模様をラジオ関西の特別番組として放送することとなった。そして、司会にラジオ関西の長寿番組である「青春ラジメニア」の南かおり氏とワタナバフラワームサ氏をお迎えして、「看護は“みんなのハートフルステーション”」として、公開収録の形式でトークショーを開催した。(収録した番組は、2025 年 2 月 18 日(火)18 時～19 時 30 分にラジオ関西で放送された。)

第 2 部では「いのちと健康を守るために～災害看護の現在・過去・未来～」をテーマとしたパネルディスカッションを開催した。阪神・淡路大震災の発災当時、神戸赤十字病院で看護師として勤務していた、野村美智子氏の基調講演の後、野村氏に加え、保健師の立場から保健福祉局保健企画担当局長であった山崎初美氏、さらに本学で災害看護の教鞭をとっている神原咲子教授を交え、本学の池田清子教授がファシリテーターとして、ディスカッションを行った。プログラムの詳細を表 1 に示す。

表 1 プログラム内容

12:50	開場・受付
13:57～	「しあわせ運べるように」動画上映
14:00～	黙祷、江川学長開会挨拶
14:10～	【第 1 部】特別プログラム 青春ラジメニア presents 「看護は“みんなのハートフルステーション”」 ゲスト：林原めぐみ（声優） 司 会：南かおり、ワタナベフラワー ムサ（青春ラジメニア）
15:10～	【第 2 部】パネルディスカッション 基調講演 「いのちと健康を守るために ～災害看護の現在・過去・未来～」 元 日本赤十字社 神戸赤十字病院 看護師長 野村美智子 ディスカッション ・パネリスト 野村美智子（元 日本赤十字社 神戸赤十字病院 看護師長） 山崎初美（元 神戸市健康局 保健企画担当局長） 神原咲子（神戸市看護大学 災害看護・国際看護学分野教授） ・ファシリテーター 池田清子（神戸市看護大学 学部長）
14:00	閉会

2. 事業の成果・実績

シンポジウムの広報については、本学ホームページや SNS のほか、2,500 枚のチラシを市内の中学校・高校、大学、看護専門学校などに配布した。また、ラジオ関西でのラジオ CM、ラジオ番組「青春ラジメニア」「林原めぐみの Tokyo Boogie Night」における番組内や、林原氏の公式 X（旧ツイッター）などでも広く告知が行われた。

当日は、看護に関心がある中高生や大学生が 36 名、医療関係者が 74 名、一般が 257 名の計 367 名が参加した。

写真：当日の会場の模様





開催後のアンケートには、136 名（一般 99 名、医療関係者 25 名、学生 12 名）から回答を得た（回答率 37.1%）。第 1 部については全員、第 2 部については約 9 割の方が「満足した」と回答した。また自由意見として、第 1 部では「林原めぐみさんの看護学生時代のエピソードはどれも心に残りました。中でも、末期の患者さんをお風呂に入れた際に『生き返った』と感謝された話は深く心に残りました」、「震災時の、偽善も集まれば善になる、という言葉は、自然災害が多いこの国ではもっと皆に知ってほしいと感じました」、「林原めぐみさんが神戸の事を大事に思ってくれているんだなあと感じて感動しました」などの意見をいただいた。

また、第 2 部についても「（震災）当時、病院や保健所で働いていた方の語りはとても貴重でした」、「実際に発災後のお話が聞けて良かったですし、私自身も被災者であり二人の遺族として、当時を思いながら、聞いていました。これからの災害に対して、自助共助の大切さ、備えをしっかりと、少しでも減災できたらと思います」などの感想をいただいた。

全体を通じての感想でも、「現役の看護学生だが、当時のことを知る機会は授業では少ないので、このような機会は今後もあると嬉しい」、「神戸市看護大学で学びたい気持ちが高まりました」、「看護学科を持つ大学がかなり増えた昨今、あまり他学が実施されていないアプローチで看護学や防災に関心を持ってもらおうとした今回の試み、大変興味深く感じました」といった意見をいただいた。

今回のシンポジウムが、学生、医療従事者以外の一般の方々にも、震災と看護について考える機会となり、神戸市看護大学の存在を幅広く知っていただく契機にもなり、有意義な取り組みであったと考える。

なお、シンポジウムの模様はラジオ関西の放送以外にも、ラジオ関西のウェブメディアである「ラジトピ」でも発信された。

ラジトピ当該記事 URL（2025 年 6 月 16 日アクセス）

<https://jocr.jp/raditopi/2025/02/22/617672/>

<https://jocr.jp/raditopi/2025/02/22/617687/>

Ⅱ 大邱保健大学からの視察・交流会

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子

1. 学内対応者

学長	江川幸二
センター長	岩本里織
メンバー	池田清子、神原咲子、船越明子、森山美香、水川真理子、藤本佳子

2. 視察・交流会概要

学生の交流や研究面での教員間の交流のために、2024 年 2 月 21 日に大邱保健大学のグローバル大学 30 プロジェクトに参加し、連携を行うこととなり、意向確認書(LOI: Letter of Intent)に双方が署名を行い、協定が締結された。

今年度は、2024 年 12 月 16 日に大邱保健大学校より 2 年生～4 年生の学生 20 名と教員 5 名が本学に来学され、本学の視察と学生・教員間の交流を行った。大邱大学の学生と教員は、実習施設などを見学した後、本学における看護カリキュラムなどについての講義を聴講した。その後の本学 2 年生の国際看護論授業では、グループワークに韓国の学生が一人ずつ加わり、「グローバルな健康危機と地域の課題」などについてディスカッションを行った。日韓の学生同士は、言語の壁を越えて活発に交流を行うことができる貴重な機会となった。また、大邱保健大学教員と本学学長らとの懇談会も開催され、両大学の教員が文化や医療体制、教育体制の違いなどをふまえて、今後どのように大学間交流を進めるかについて話し合いがなされた。

写真：大邱保健大学校からの来学者



写真：国際看護論授業グループ演習



Ⅲ 映画上映会「じょっぱり～看護の人 花田ミキ～」開催報告

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子

1. センターメンバー

センター長 岩本里織
副センター長 片倉直子
メンバー 水川真理子、藤本佳子

2. 事業の実際

いちかんダイバーシティ看護開発センターでは、これまで地域住民や医療保健専門職向けの映画上映会を開催してきた。今年度は、2025 年 3 月 8 日（土）13:30～15:15 に、本学ホールにおいて、映画「じょっぱり～看護の人 花田ミキ～」の上映会を開催した。「じょっぱり」は、戦中戦後の激動期に「保健と看護」に生涯を捧げ『青森のナイチンゲール』と評された実在の人物・花田ミキ（1913～2006）さんの波乱万丈の生涯と命の尊さを映画化したヒューマンドラマで、地域住民、医療保健介護専門職や、学生の皆さんに、改めて【看護の魅力】を知っていただくために企画した。

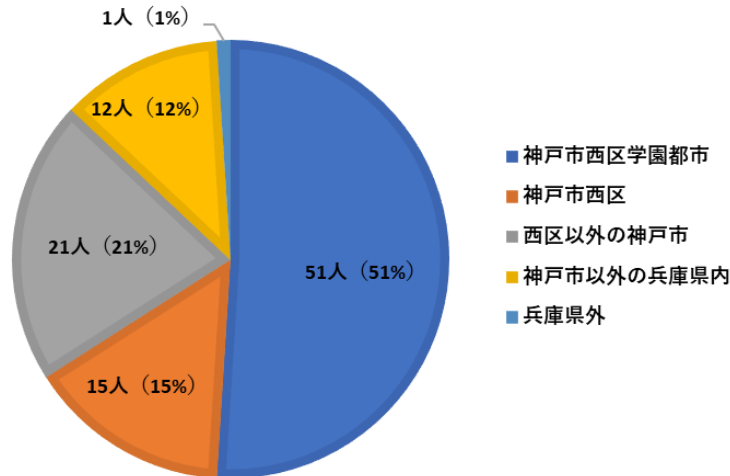
3. 事業成果・実績

当日は、10 歳代から 80 歳代までの幅広い年代の地域住民、医療保健介護専門職者、学生（中学生、高校生、大学生、大学院生）の総勢 140 名が参加された。

開催後のアンケートには 100 名から回答を得た（回収率 71.4%）。アンケート回答者の 9 割を超える方が満足したと回答し、「言葉では表現出来ないくらいに、心に響くとても感動的な映画だった」「戦争に巻き込まれながらも信念を貫き行動して懸命に生きた姿“人は人のために生きてこそ人”に感銘した」といった感想や、「将来、看護師になりたい私としては、ただ単に看護するのが看護師の仕事ではないということを知ることができた。また、当時の社会の問題を指摘し、自分から積極的に発言したり行動したりする花田ミキさんのように色々なことに目を向けられる人になりたいと気づくことができた」、「戦時中の従軍看護師の厳しい業務内容を知ることができた。また戦後間ない時期の僻地の厳しい医療体制を知ることができた。それに立ち向かって県庁の改革をしていった花田さんを同じ看護職者として心から尊敬します」などの感想をいただいた。以下にアンケート結果の一部を示す。

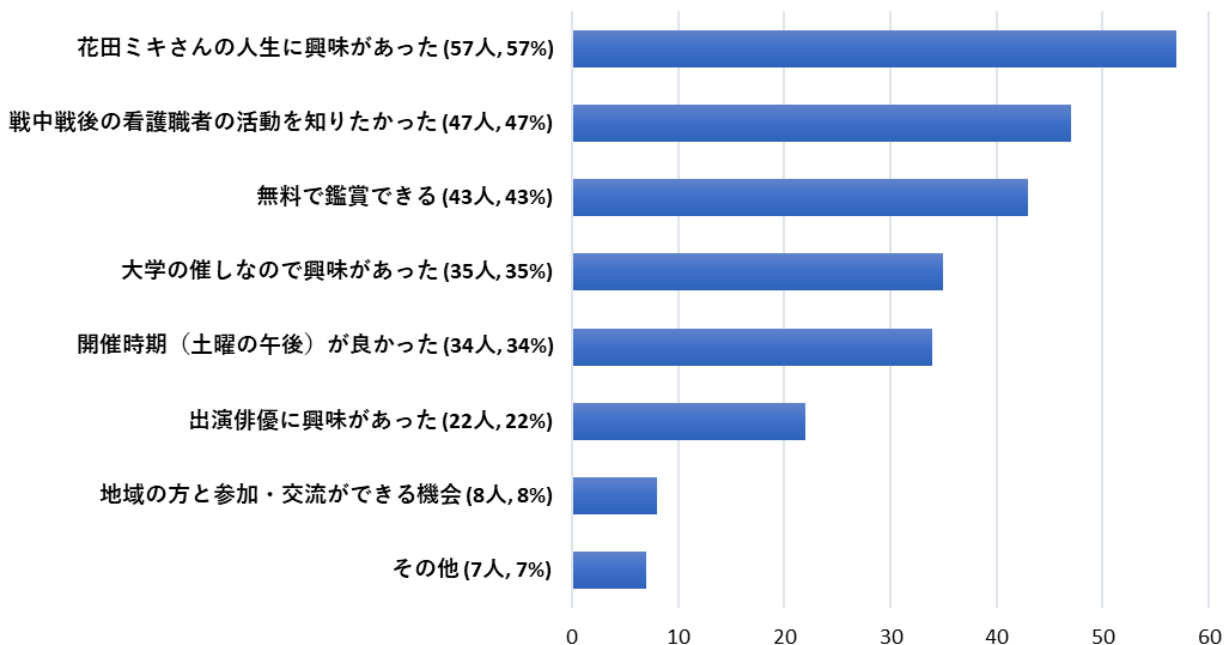
1) 回答者の居住地

回答者の住まいまたは所属先の地域は、学園都市が 51 人（51%）、学園都市以外の西区が 15 人（15%）、西区以外の神戸市 21 人（21%）、神戸市以外の兵庫県内が 12 人（12%）、兵庫県外が 1 人（1%）であった。



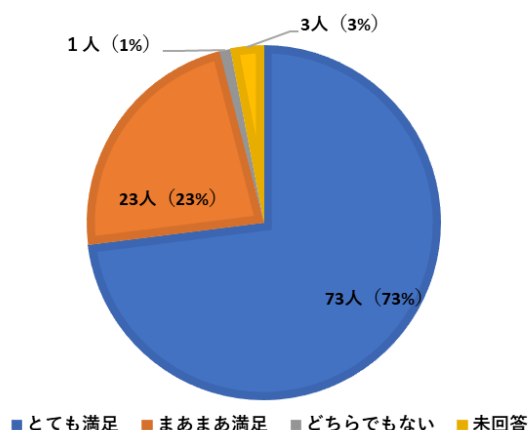
2) 名画上映会参加のきっかけ

映画上映会に参加したきっかけとして最も多かったのは「花田ミキの人生に興味があった」57 人（57%）で、次いで「戦中戦後の看護職者の活動を知りたかった」が 47 人（47%）、「無料で鑑賞できる」が 43 人（43%）、「大学の催しなので興味があった」が 34 人（34%）、「開催時期（土曜の午後）が良かった」が 34 人（34%）、「出演俳優に興味があった」が 22 人（22%）、「地域の方と一緒に参加・交流ができる」が 8 人（8%）、「その他」が 7 人（7%）であった（複数回答式）。



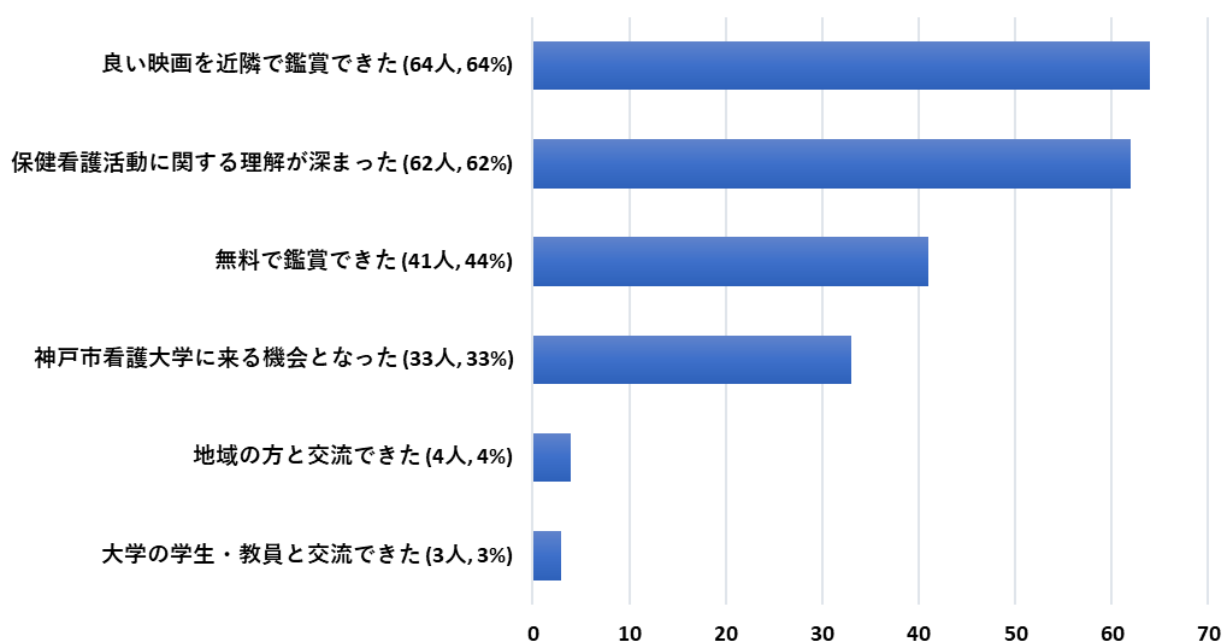
3) 満足度

映画上映会に参加した満足度は、「とても満足」が 73 人（73%）、「まあまあ満足」が 23 人（23%）、「どちらでもない」が 1 人（1%）、「未回答」が 3 人（3%）で満足度が高いイベントであった。



4) 参加して良かった点

映画上映会に参加して良かった点として最も多かったのは「良い映画を近隣で鑑賞できた」64 人（64%）で、次いで「保健看護活動に関する理解が深まった」が 62 人（62%）、「無料で鑑賞できた」が 41 人（41%）、「神戸市看護大学に来る機会となった」が 33 人（33%）、「地域の方と交流できた」が 4 人（4%）、「大学の学生・教員と交流できた」が 3 人（3%）であった（複数回答式）。



写真：受付の様子



写真：会場の様子



IV まちの保健室

在宅看護学分野 丸尾智実

1. グループ概要

神戸市看護大学「まちの保健室」は、兵庫県看護協会神戸西部支部の活動として、2005 年 12 月から地域住民を対象に実施している。出産・子育て、生活習慣病やこころの健康、介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、協力分野の教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的としている。

2023 年度までは、地域連携グループの活動の 1 つとして位置付けられてきたが、中期目標である「市民との連携・交流による、地域の保健医療への貢献の推進：市民との交流促進」において主要な役割の 1 つを担うことから、2024 年度より 1 つのグループとして独立して活動することとなった。まちの保健室グループメンバーは、兵庫県看護協会神戸西部支部との連携、まちの保健室の活動の企画・運営等の中心的な役割を担っているが、メンバー以外の多くの教員の協力により活動が成り立っている。

2. グループメンバー

リーダー 丸尾智実

メンバー 秋定真有、池田清子、石関美津子、角田響介、片山修、神原咲子、
山田暢子、山本陽子

3. 活動内容

現在は、地域住民の方々を対象に各協力分野の専門性と地域住民の健康ニーズを考慮した健康講座と健康相談で構成する『健康支援』、子育て中の保護者とその子どもを対象に健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進を支援する『子育て支援』、こころの悩みを抱えている方を対象に看護相談をおこなう『こころと身体の看護相談』、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援をおこなう『もの忘れ看護相談』の 4 つの拠点を開催して活動している。

今年度、兵庫県看護協会のまちの保健室の趣旨に賛同し、神戸西部支部のまちの保健室のボランティアに登録した教員は 24 名であった。以下、表 1 に今年度担当した教員を示す。

表 1 2024 年度まちの保健室担当教員一覧

活動拠点	担当した教員
健康支援	第 1 回：内山、新澤、赤松 第 2 回：岩本、山下、遠藤、山田 第 3 回：森山、佐藤(隆)、佐藤(智)、石関 第 4 回：丸尾、片倉、大瓦、中川 (フットケア：3 回シリーズで構成) 第 5～7 回：畑中、池田 (清)
子育て支援	山本、二宮、半田、清水、福井
こころと身体の看護相談	角田、船越、田中、関口
もの忘れ看護相談	秋定、坪井、石橋、蒲谷

※ 担当教員は兵庫県看護協会まちの保健室ボランティアに登録していない協賛ボランティアを含む

(1) 健康支援

健康支援は、当初の計画通り 7 回すべての活動を開催することができた。以下、表 2 に今年度の開催状況および概要を記す。また、各活動の概要を以下に報告する。

表 2 2024 年度の『健康支援』開催状況

回	日程	テーマ	参加数 (人)	スタッフ数 (人) ※院生・学生含
1	6 月 7 日	「温める&マインドフルネス」でセルフケア	40	7
2	11 月 14 日	生活体力を測ってみませんか？	44	4
3	2 月 26 日	～人生会議～ 「あなたにとって大切なことは何ですか」	8	4
4	3 月 7 日	認知症予防と在宅看護～訪問看護ができること～	12	4
(フットケアは 3 回シリーズで構成)				
5	7 月 13 日	「フットケアの日～歩ける足をいつまでも！～」 あなたの足のトラブルにお答えします	38	20
6	10 月 12 日	秋です！歩き方講座	56	23
7	2 月 22 日	歩ける足のためのさまざまな足のケア	55	19
合計			253	81

第 1 回：キーワードは自然治癒力！セルフケアしてみましょう「温める」&「マインドフルネス」

内容および全体スケジュールは、内山講師による企画の趣旨説明・自然治癒力の講義（10 分）後、新澤講師による「マインドフルネス」（40 分）、休憩（10 分）、内山講師による「温める（温罨法）」（60 分）、最後に質疑応答や意見交換とした。

「マインドフルネス」では、マインドフルネスの定義とともにこころのセルフケア方法としての機序を講義し、呼吸法と立位のヨガの演習を実施した。演習では、講師がガイド役となり参加者はガイドを聞きながら呼吸法や立位のヨガを行った。次の温罨法では、身体を温める効果やその機序を講義した。演習では、各参加者に温タオル 1 枚＋ビニール袋、タオル 1 枚を配布し、参加者は温めたい部位への貼付を体験した。さらに、熱布を自宅で作成する簡便な方法（ポリエチレン袋にタオル 1 枚を入れ、コップ 1 杯の熱湯を注ぎ作成）のデモンストレーションを行った。当日の参加者からは、「こんなに長い時間タオルが温かくて驚いた」「気持ちが良い」「家でもできそう」等の感想があった。

アンケート結果では、「とても満足」「まあ満足」と回答した方が約 8 割であり、理由として「効果が実感できた」「ガスが出やすくなり、歩くとびにプップツとなります。メカニズムを教えてほしい」「すばらしい体験をさせていただいただけでとてもリラックス、気分よくしていただきました」「不安なことがいろいろ有り、体調を崩していたのでとても良かったと思います」など、特に体験型であったことが好評につながったと評価できた。参加者が 40 名であったことや参加動機「自然治癒力、セルフケアに興味を持てました」「体の健康が気になってきた」「健康を維持したい」というアンケート結果からも、今回の企画は地域住民のニーズにあったと評価できた。

（文責：内山孝子）

第 2 回：生活体力を測ってみませんか？

本企画では、本学の教員や保健師選択課程の 4 年生が参加者の身体計測や体力測定を行い、測定結果をもとに各参加者へ健康づくりについてアドバイスをを行った。参加者は血圧・脈拍測定と問診を受けた後ストレッチを行い、身長、体重、体組成、握力、足指力、長坐位、開眼（閉眼）片足立ちや 5m 歩行（座位ステッピングテスト）を測定した。



（写真：健康相談の様子）

終了後に参加者からは、「現在の体力状況を知ることができました」「足裏筋力をつける必要を感じました。今日、受けてよかったです」「健康に不安を感じながら生活しているので、近くにこんな日頃測定してもらったことがない項目について色々測定、アドバイス頂きましたのは良かったです。」「又、来年も参加したいと思います」など、企画に満足を得られた内容の意見が多数みられた。実施後のアンケートでも、本企画に対し約 9 割の方が「とても満足」あるいは「まあ満足」と答えたことから、参加者にとって満足で

きる内容であったと考えられる。例年、約 6 割が過去に本企画に参加経験のあるリピーターである。また西区以外からの参加者も約 3 割いることから、本企画の需要は高いことがうかがえる。次年度以降も地域の方が自身の体力を知り、健康の維持・増進のための生活習慣について考えられる場となるよう、継続して実施していきたいと考える。

(文責：山田暢子)

第 3 回：～人生会議～「あなたにとって大切なことは何ですか」

当日は飛び込み参加者 2 名と予約者 6 名の、合計 8 名の参加があった。前半は講義形式でパワーポイントを使いながら進め、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の概要や大切さについて、事例を交えて説明した。ACP のステップについては、神戸市医師会が作成したシートを活用し、参加者それぞれに「自分にとって大切なこと」を考えながら、項目ごとに書き込んでいただいた。

後半は「人生会議カフェ」というグループワークを行った。参加者は 3 つのグループに分かれ、各グループには教員 1 名がファシリテーターとして加わり、自分にとって大切なことや話し合える大切な人について伝えあっていただいた。グループワークでは、「今まで考えたことがなかったけれど、今から考えたい」と話す方のほか、配偶者の最期を自宅で看取った方や、現在母親の延命治療について決断を迫られている方など、ご家族の終末期に向き合った経験を語る場面も見られた。そのような実体験の共有もあり、それぞれの価値観の違いや家族と話し合うことの大切さや難しさを改めて感じる機会となっていたと考える。

実施後のアンケートでは、「なんとなくしか考えていなかったが、今から家族と話すことが大切だと気づいた」「ほかの参加者と話せてよかった」「とても有意義な時間だった」「ぜひまた開催してほしい」といった感想が寄せられた。また、健康寿命の延ばし方や定期健診の頻度についても知りたいという声もあり、ACP に関心を持つとともに、自分の健康や将来について、より具体的に考えたいという気持ちの高まりがうかがえた。特に課題となるような意見や要望はなく、全体を通して安心して話せる雰囲気の中で、参加者同士が自分の思いや考えを自然に伝え合っていたと感じる。

(文責：石関美津子)

第 4 回：認知症予防と在宅看護～訪問看護ができること～

本講座では、認知症や生活の中でできる認知症予防について解説した後、参加者全員で二重課題運動等の体験をおこなった。その後、訪問看護が認知症予防や認知症をもつ方にできることについて解説し、参加者と意見交換をした。意見交換では、訪問看護をどのようにしたら利用できるか、訪問看護に



(写真：講座での体験の様子)

おける他職種との連携について等の熱心な質問が寄せられた。参加者からのアンケートでは「とても満足した」「まあ満足した」と全員が回答し、参加者の関心のあるテーマであ

ったと考えられた。また、自由記載には、「体験もありよかった」「ちょっと心配していたことが大丈夫と思えた」「訪問看護の内容が少しわかってよかった」などの感想や、「訪問看護について知っておきたい」「高齢者の健康管理の話がききたい」という意見があったことから、訪問看護や健康管理に関するニーズが高いことが考えられた。今後も、地域の方のニーズを踏まえながら、地域の方にわかりやすく訪問看護や在宅療養生活のコツを伝えていく機会を作っていくことが必要と考えられた。

(文責：丸尾智実)

第 5～7 回：歩ける足をいつまでも！（3 回シリーズ）

今年度は、「歩ける足をいつまでも！」をテーマに年 3 回開催した。1 回目は、7 月 13 日、2 回目は 10 月 12 日、3 回目は 2 月 22 日であった。3 回ともに看護職者が足のアセスメント（爪の状態、拇指の外反角度、足趾力、神経障害の有無、症状等）を行い、参加者にアセスメント結果をフィードバックした。また足の健康に関連したミニ講座として、1 回目は靴職人による「靴のトラブルと靴選び」、2 回目は理学療法士による「正しい歩き方」、3 回目は形成外科医による「足と健康寿命について」をテーマに専門的な内容を参加者にわかりやすく話してもらった。3 回ともに最後に個別の相談を実施した。

参加者は、1 回目は 38 名、2 回目は 56 名、3 回目は 55 名であった。参加者のアンケート結果では、1 回目、2 回目、3 回目ともに「とても満足」「まあ満足」が 91～100%、「自分のからだについて知ったり、考える機会になった」が 100%であった。いずれの開催日においても参加者の足の健康への関心度は高く、個々に困っている足のトラブルを改善したいという思いが伝わってきた。連続して参加された方のなかには、前回のアドバイスに従って自宅でセルフケアを継続的に実施されていた方もいた。

これらの状況より、足の健康を維持したいとの地域住民のニーズは高く、今後も足のアセスメントやフットケアに関する講座は継続する必要があると考える。

(文責：池田清子)

(2) 子育て支援

地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、子どもに関する相談を行うとともに、参加した親子同士の交流が図れる機会を提供することを目的に 2006 年から年 6 回実施してきた。新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた時期はオンラインでの相談対応も実施したが、2022 年度以降はコロナ禍以前と同様に対面での子育て相談を本学コラボカフェ内で行ってきた。

今年度も参加者は少ない状況であったが、毎回継続して参加してくださる参加者もあり、参加されている親子の様子からは遊び場としても活用されている様子が窺えるため、楽しみながら参加できる子育て相談の場として機能しているものと考え。これまでは午後に開催していたが、乳幼児の生活スタイル（午睡など）を考慮すると午前中の方が参加しやすいと考えたため、次年度は開催時間を午前に変更する予定にしている。また、保護者同士が出会える場としても活用できるように、さらなる広報活動を検討していきたい。

表 3 2024 年度の『子育て支援』活動状況

年	日程	参加者数	主な相談内容
2024 年	5 月 8 日	3 組 6 人	子どもとの関わり方、発達、離乳食についてなど
	7 月 3 日	1 組 2 人	排泄、成長発達についてなど
	9 月 18 日	1 組 2 人	トイレトレーニング、成長発達についてなど
	11 月 20 日	2 組 3 人	子どもとの関わり方、イヤイヤ期の対応など
2025 年	2 月 12 日	1 組 2 人	子どもの睡眠、こどもとの関わり方についてなど
	3 月 5 日	1 組 2 人	子どもの気になるくせについてなど

(文責：山本陽子)

(3) こころと身体の看護相談

「こころと身体の看護相談（以下、看護相談）」は、心身に不調のある方とそのご家族が気軽に相談できる地域のおよび精神看護専門看護師を目指す大学院生の教育の場として、2007 年 6 月より月 1 回（木曜日の午後・都合により曜日の変更有）、完全予約制の 1 回 12 人の相談枠で実施している。今年度より、相談場所が UNITY からキャンパススクエア本館 2 階リバティーホールへ会場が変更となった。

今年度の相談件数は 51 件、うち新規相談は 16 件、一旦終結していたが再開した相談は 3 件、継続の相談は 32 件、相談終結は 2 件であった。相談者の年代の内訳は 40 歳代が 15.7%、50 歳代が 19.6%、60 歳代が 9.8%、70 歳代以上が 54.9%であった。性別の内訳は男性が 35.2%、女性が 64.8%であった。

表 4 2024 年度相談件数（51 件）の内訳

	相談申し込み(件)			相談終結 (件)
	新規	再開	継続	
延べ件数(件)	16	3	32	2

表 5 2024 年度相談者（51 件）の年代内訳

年代	10 歳代	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代以上
件数 (%)	0	0	0	8 (15.7)	10 (19.6)	5 (9.8)	28 (54.9)

表 6 2024 年度相談内容内訳（複数回答）

相談内容	対人関係の 悩み	家族関係の 悩み	自分の心身 の悩み	家族の心身 の悩み	日常生活に ついて	その他
件数 (%)	2 (3.4)	4 (6.9)	38 (65.5)	13 (22.4)	1 (1.7)	0 (0)

相談内容は自分の心身の悩みが最も多く、次いで家族の心身の悩み、家族関係の悩みが多くみられた。今年度は、広報紙 **KOBE** に加えビバ・ニュータウンに掲載したことにより昨年度と比較して新規申込者の数が約 2.7 倍に増加しており、一定の広報活動の効果は得られている。また、年代別では 70 歳代以上の相談者が最も多く、継続の割合も高いことから看護相談は社会との繋がりの中の 1 つとしての役割もあるのではないかと考えられる。一方で、10 歳代～30 歳代の若年者からの相談は依然として無く、周知方法の見直しも含めて再度検討することが求められる。悩みを抱えながらも日々の生活を送り、適切な支援へと繋がらない若年者への看護支援の在り方を再考していくことが必要であるとうかがえた。

(文責：角田響介)

(4) もの忘れ看護相談

「もの忘れ看護相談」は 2012 年 3 月より開設し、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう、知識の普及啓発のための 30 分間のミニ講義と希望者には教員が対応する個別相談を実施している。2024 年度の「もの忘れ看護相談」は、4 回開催し、参加者数は延べ 48 名であった。

表 7 『もの忘れ看護相談』参加者数と運営人数(人)

※()は個別相談利用者

開催日	ミニ講義参加者数			運営人数			
	65 歳以上	65 歳未満	計	教員	ボランティア	計	
5 月 15 日(水)	10 (3)	0 (0)	10 (3)	4	大学院生 1 学部生 2	あんしんすこやか センター職員 2	9
7 月 3 日(水)	7 (5)	2 (0)	9 (5)	4	大学院生 1 学部生 1	あんしんすこやか センター職員 1	6
8 月 6 日(火)	14 (0)	3 (0)	17 (0)	2	—	—	2
10 月 18 日(金)	11 (4)	1 (1)	12 (4)	2	大学院生 1 学部生 3	あんしんすこやか センター職員 1	7

今年度も感染や熱中症予防に配慮した上で 4 回開催した。今年度のミニ講義のテーマは、「今の認知症予防の考え方と生活上のひと工夫」「認知症の人の対応に困らないかわり方」「地域で認知症の人とその家族を支える」「今のうちから備える認知症の人の ACP」とした。ミニ講義では、自身のもの忘れが気になる方や認知症の診断を受けた方のご家族に加え、友人のもの忘れを心配されている方の参加など、様々な立場の方が参加された。

個別相談では、延べ 12 名(10 組)の相談があり、主な相談内容は、日常生活で自身のもの忘れを自覚したことや他者から指摘されたことに伴う不安、認知症予防に関すること、認知症の家族との接し方、独居の友人のもの忘れへの対応など多岐に渡っていた。また、自身や家族のもの忘れを不安に感じ、神戸市の認知症診断助成制度を利用した方が半数以上みら

れたが、受診結果にかかわらずその後の生活に不安を感じている方が少なくないことがうかがえた。

今年度は、コロナ禍以降半減していた参加者数に大幅な回復がみられた。近年、それぞれの地域で認知症に関する講義や事業が数多く展開されているが、今年度も様々な立場にある多くの方の参加があったことから、本学で開催するもの忘れ看護相談に一定のニーズがあることがわかった。今後も、開催時期や方法、地域のニーズをふまえた内容となるように工夫し、地域の人々にとってのもの忘れや認知症に関する相談が身近にできる場として活動を継続していきたいと考える。

(文責：秋定真有)

4. 活動の成果

昨年度までの課題であった広報活動について、今年度は実習でお世話になっている地区や地元の広報誌に掲載する等の拡大を図った結果、新たな参加者の増加につながった。また、それぞれの拠点活動で地域住民のニーズを検討し内容の工夫を凝らした結果、多くの申し込みがあった拠点活動もあった。さらに、それぞれの拠点活動での参加者アンケートの結果からは本活動への満足度が高いことが示されており、中期目標にある「市民との連携・交流による、地域の保健医療への貢献の推進」という点において、一定の役割を果たせたと考えている。特に、まちの保健室では、異なる専門性を持つ多くの教員の協力を得て活動を継続していることから、地域社会の健康に関する多様なニーズを踏まえた活動ができていると評価できる。

5. 今後の課題

広報について、一定の効果があったと評価できるものの、さらに効果的な広報や運営方法について引き続き検討していく。また、活動の報告等を通して広く地域住民にまちの保健室の活動を知ってもらおうという点では課題が残る。これまで長年にわたって継続しておこなってきた本学のまちの保健室活動が地域住民に広く認知してもらえよう、地域住民のニーズに応えられる内容の検討と、活動の周知について引き続き取り組んでいく。

Ⅴ 防災減災支援グループ

災害看護・国際看護学分野 神原 咲子

1. グループ概要

防災減災支援グループは災害や新たな疾病等の健康危機に対する備え、災害時における福祉避難所の支援などの本学の役割の検討を含め、地域の防災減災活動に資する看護の教育・研究・実践活動を行うグループとして結成された。2024 年度の主な活動は、災害への備えとして、兵庫県防災リーダーステップアップ講座、須磨区避難所運営訓練、兵庫県自治体研修などへの企画、講師派遣やワークショップの企画などで協力し、本学の地域防災・減災活動における看護対応や新たな地域ニーズを検討した。また、大学都市神戸産官学プラットフォーム事業に参画し、地域の防災・減災に関する人的ネットワークを拡げた。

2. グループメンバー

リーダー 神原咲子

メンバー 池田清子、岩本里織、岩本華子、藤永竜太郎、畑中あかね、藤本佳子
水川真理子、山下正、後藤由紀子

3. 2024 年度の取り組み内容と結果

(1) 大学都市神戸産官学プラットフォーム

「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」の取り組み

本学は 2024 年度より、大学都市神戸産官学プラットフォームの「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」事業に参画し、神戸大学、神戸学院大学、神戸松蔭女子学院大学、兵庫県立大学のほか、企業、行政と連携を行い、地域防災に関する取り組みを行った。今年度は、「つながりから広がる、地域防災の未来」と題したセミナーが 3 回開催され、本学からは、第 1 回と第 3 回セミナーに参加した。

1) 第 1 回セミナー「能登半島地震から次の 30 年を考える」

2024 年 8 月 28 日に、「能登半島地震から、次の 30 年を考える」セミナーに参加した。第 1 部で、本学を含む 5 大学が、それぞれの専門性を活かした取組みを報告し、本学からは、本センターの概要紹介や、看護の視点からの地域防災への関与について発表を行った。第 2 部では、金沢大学の能登半島地震後の対応、神戸市の帰宅困難者支援システム、フェリシモ、ホテルオークラの企業による復興支援の取組み等が紹介され、分野横断的な連携の重要性が強調された。災害に備えるためには、制度や ICT の整備に加え、地域の多

様な主体が、“つながる”ことが不可欠であると再認識した。得られた知見を今後の教育・研究・実践に活かしていきたい。

2) 第3回セミナー「みんなの避難の場～多様性と包摂性を考える～」

2025年2月26日に、神戸市立中央区文化センターにおいて、「みんなが避難する場づくり」をテーマとし、いつ起こるか分からない南海トラフ巨大地震に備えるために、能登半島地震被災地でのリアルな対応を地元や神戸市派遣職員の方々から学び、全員で避難所設営とワークショップに取組みながら、今からできる備えを大学（教員、学生）、企業、行政、地域住民50名で共に考えた。

第1部のパネルディスカッションでは、地域住民より、マンションでの防災などについて質問があり、神戸市中央区の増田区長や須磨区地域協働課の山林氏らと課題と対応策について話し合った。

都市で起こる災害の課題としては、日中の人口は夜間人口よりはるかに多く、ひとたび災害が起こると、街には地域住民のほかに、就労者や、買物客、観光客などの帰宅困難者で街が溢れかえることが想定される。第2部の避難所設営セッション・ワークショップでは、本学よりそうした帰宅困難者（外国人、高齢者、妊婦）の事例を提示し、それぞれの立場にたった困りごととその対応について検討した。

大学都市神戸産官学プラットフォーム
採択プロジェクト「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」

つながりから広がる、地域防災の未来セミナー
第3回 みんなの避難の場～多様性と包摂性を考える～

日時 2025年2月26日（水）午後2～5時30分

第1部 対談／パネルディスカッション

〇〇〇〇〇 被災地での避難所運営経験者・観光
青谷 実知代 神戸松蔭女子学院大学人間科学部 准教授

増田 匡 神戸市中央区長
(仮) 山林 伶央 神戸市須磨区地域協働課
神原 咲子 神戸市看護大学災害看護・国際看護学分野 教授

第2部 避難所・設営セッション

神戸市看護大学 教員
櫻井 貴之 神戸市中央区地域協働課 係長
小林 秀人 避難所用テント・段ボールベッド/間仕切り設営
大和リース株式会社 民間活力研究所
経営と福祉の避難所関係知見と段ボールベッドの設営
サタリーム・サタリーム・サタリーム・サタリーム・サタリーム
多様な応急仮設住宅（建設型）の紹介

第3部 ワークショップ 参加者全員でワークショップ

学生発表：神戸松蔭女子学院大学 地域インターンシップ
神戸市看護大学 学生ボランティア部
神戸大学 Kobe Med Connect

<大学都市神戸産官学プラットフォーム紹介>
藤岡 健 大学都市神戸産官学プラットフォーム事務局長
<2025年度プロジェクト事業の紹介>
山地 久美子 神戸大学地域連携推進本部特命准教授
司会 松下 正和 神戸大学地域連携推進本部特命准教授

会場 神戸市立中央区文化センター11F会議室
(住所：兵庫県神戸市中央区東町115番地)

申込 事前申し込み制 **申込締切 2月24日（火）**
右のQRコードまたは下記のURLからお申し込みください
<https://forms.gle/h1WHZ8sw0SISAWUA>

【主催】一般社団法人大学都市神戸産官学プラットフォーム
採択プロジェクト「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」
神戸大学 神戸学院大学 兵庫立大学 神戸市看護大学 神戸松蔭女子学院大学
TEL: 078-9546921 E-mail: info@kshuinfo.ac.jp

**参加費
無料**



**定員50名
(先着順)**



写真
第3回セミナーの様子

（２）各種避難防災研修等への協力とニーズ把握

2024 年 8 月 4 日、洲本総合庁舎にて実施された兵庫防災リーダー講座において、「感染症を含む複合災害における避難生活と公衆衛生」をテーマに講義を担当した。災害と感染症の同時発生という現実的な課題に対し、避難所における生活支援、公衆衛生管理、心身のケアを多角的に検討する内容とした。受講者は非常に高い関心と実践的視点を持って議論に参加しており、地域防災において、看護実践（日常生活援助）と防災の学びが循環する機会を重ねていくことが重要であることを理解した。

2024 年 8 月 4 日、神戸市民総合防災センターにて開催された市民公開講座にて、講師として登壇した。本講座では、冒頭に豪雨による浸水体験を行い、その臨場感を踏まえた上で、二次災害のリスクと減災ケアをテーマに構成されたプログラムを展開した。参加者は 70 名を超え、年齢層も幅広く、防災意識の高い神戸市民が集い、活発な対話と共創が行われたことは、防災文化が地域に根付いている証と感じた。楽しさと実践性を両立させた講座運営を意識しながら、参加者と共に災害に備えるための視点を深める貴重な機会となった。今後も市民と共に学び、行動へと繋げる防災教育を継続していきたい。

2024 年 8 月 17 日、「防災リーダーステップアップ講座」において、兵庫県内の防災士・防災リーダー計 100 名を対象に終日プログラムを担った。本講座では、午前中に「避難所・避難生活支援概論」として、避難所・避難生活学会理事らを招き、能登・台湾地震の事例を生活行動の観点から振り返るとともに、アメリカ、イタリア、台湾の避難制度と文化の違いを学び、日本の災害救助法と事例の理解を深めた。午後は、避難生活における課題をロールプレイで掘り下げ、時系列に整理した地域課題を自助・共助・公助に分類し、行動計画に落とし込む演習を行った。講座には、全盲で防災士活動を行う榊原氏にも登壇いただき、多様な視点を得る機会ともなった。参加者は阪神淡路大震災以降の実践者が多く、経験に裏打ちされた議論が交わされ、地域の防災士との協力した今後の訓練と仕組みづくりに繋げるべき貴重な機会であった。



写真 防災リーダーステップアップ講座の様子

2024 年 10 月 6 日、須磨区板宿小学校にて実施された避難訓練の準備段階から、企画へのアドバイスをを行い、ミニ講義を行うなど協力した。本訓練では、自宅からの避難を想定し、ペット同行避難にも対応するなど、実際の災害時に即した内容が盛り込まれた。天ぷら火災のデモンストレーションと消火訓練は消防によって行われ、避難所運営ガイドは冊子に加え、能登地震支援に携わった自治体職員の実体験を展示という形で共有した。避難所設営は参加者全員で行い、配慮に関するミニ講義を通じて多様な視点から課題を考察した。20 年以上前から福祉防災コミュニティづくりに関わる 90 歳代の参加者も加わり、多世代による実践的な学びが展開された。最後は一連の活動を動画で振り返り、キッチンカーの食事で締めくくられた。多様な主体の協力のもと、2 時間充実した内容となった。

2024 年 11 月 17 日西区学園東町小学校の避難訓練に参加した。防災コミュニティの代表らからニーズを聞き取り意見交換を行い、最後の講評を行った。



写真 板宿小学校での避難訓練の様子

（３）その他

2024 年 11 月 30 日に、第 8 回世界災害看護学会を本学で開催し、本学主催で市民向けソーシャルプログラムを開いて取り組みを紹介し、近隣地域住民の方々が来場し、防災啓発や意見交換が行われた。

VI 在宅ケア支援グループ

1. グループ概要

在宅ケア支援グループは、在宅サービス提供者への支援を目指して活動しており、2021年度から2022年度まで神戸市健康局の委託事業を中心に行ってきた。神戸市の委託は、当初、①兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会等との協働による感染症防止対策や、患者や家族へのケアを提供する体制づくりに関する研修の実施及びマニュアル・教育動画の作成、②多職種連携会議や事例検討会の開催支援、③医療介護従事者を対象とする個別相談窓口の開設となっていた。その後、神戸市と協議を重ねた結果、2021年度の事業として、①訪問看護ステーション連絡協議会等との協働による研修事業、②オンラインを使用した多職種による退院時協働指導モデルの検討、③COVID-19 禍における神戸市訪問看護事業所調査を実施することになった。2022年度は、継続の必要性がある2研修と、2021年度調査の結果にもとづき必要が生じた1研修を、神戸市内訪問看護事業所または在宅療養を支援する事業所へ提供した。

2023年度は、訪問看護ステーションBCP策定過程講演会、在宅療養者の精神状態のアセスメント研修、外国人の在宅療養時の意思決定の支援方法を学ぶ研修の3事業、および訪問看護師を支援する研修内容の検討をするために、2023年度 ならぬ 2023年度 なる訪問看護研究助成金を獲得した。2024年度は、「研修2事業」および研究助成による調査結果の報告をする。

2. グループメンバー

リーダー 片倉直子

メンバー 船越明子、片山修、丸尾智実、水川真理子、大瓦直子、中川恵津子

3. 研修事業

(1) これで良いのか、睡眠薬・抗不安薬

～在宅療養者のベンゾジアゼピン系薬剤の使用を考える～

精神看護学分野 船越 明子

1) 背景

不安や不眠などの症状があり抗不安薬・睡眠薬が処方されている在宅療養者は多い。しかし、ベンゾジアゼピン系薬剤の長期服用は、身体依存や副作用が出現したり、中止による離脱症状が生じたりすることがあるため、漫然とした継続投与による長期使用を避けるために2018年に処方制限が強化された。療養者にあった適切な薬物療法が実施されるた

めに、訪問看護師は在宅療養者の不安や不眠の症状や薬効・副作用を正確にアセスメントする能力が求められる。

2) 事業内容・経過

本研修では、不安・不眠の症状がある在宅療養者に使用される睡眠薬や抗不安薬について、症状管理、薬効・副作用のアセスメント、適切な使用についての基礎的な知識を身につけることを目的としたオンライン研修を実施した。研修の到達目標は、以下の2点である。

- ・薬物療法が必要な不安・不眠の症状を理解することができる。
- ・抗不安薬を内服している在宅療養者の症状をアセスメントする際のポイントを理解することができる。

日時と講師は以下の通りである。

日時：2024 年 10 月 19 日（土） 14:00-16:00

講師：中村友喜先生（三重県立こころの医療センター 診療技術部 薬剤室 室長）
著書に、「ゆるりとはじめる精神科の1冊目 病気がわかる くすりがわかる（じほう，2021 年）」。

方法：ZOOM によるリアルタイムのオンライン研修

3) 業務成果・実績

①研修参加者の状況およびアンケート回答者

本研修は訪問看護ステーションやクリニックなどに勤務するスタッフを対象として参加者を募集した。事前参加申し込みは 83 人で、当日は 49 人が参加した。研修後に実施したアンケートの回答者は 39 人（回答率：79.6%）であった。

回答者の所属勤務先所在地域は、「神戸市内」が 18 人（46.2%）、「神戸市以外の兵庫県内」が 19 人（48.7%）、「兵庫県外」が 2 人（5.1%）であった（図 1）。

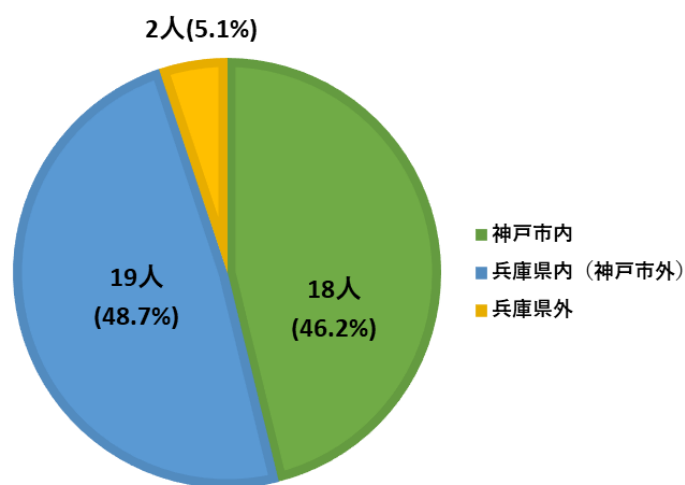


図 1 勤務先所在地域

所属施設は、「訪問看護ステーション」が 22 人 (56.4%) と最も多く、次いで「教育機関」が 7 人 (17.9%)、「病院」が 6 人 (15.4%)、「介護福祉施設」が 4 人 (10.3%) であった (図 2)。

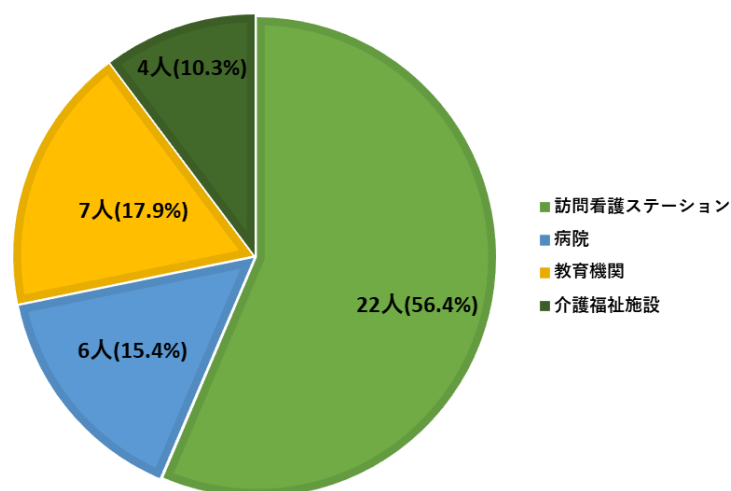


図 2 所属施設

職種は、「看護師」36 人 (92.3%)、「保健師」2 人 (5.1%)、「助産師」1 人 (2.6%) であった (図 3)。精神科訪問看護を「行っている」は 18 人 (46.2%)、「行っていない」が 21 人 (53.8%) であった (図 4)。訪問看護の経験年数は「10 年以上」が 14 人 (36.0%)、「5 年以上 10 年未満」が 3 人 (7.7%)、「3 年以上 5 年未満」が 2 人 (5.1%)、「3 年未満」7 人 (17.9%)、「経験なし」13 人 (33.3%) であった (図 5)。

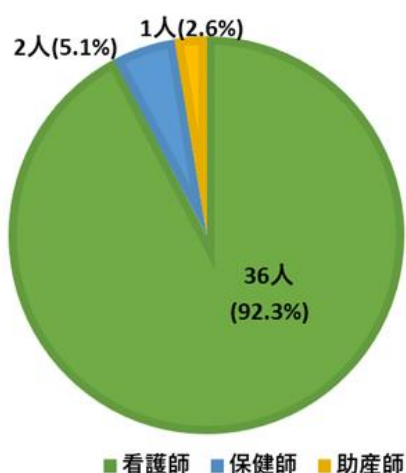


図 3 職種

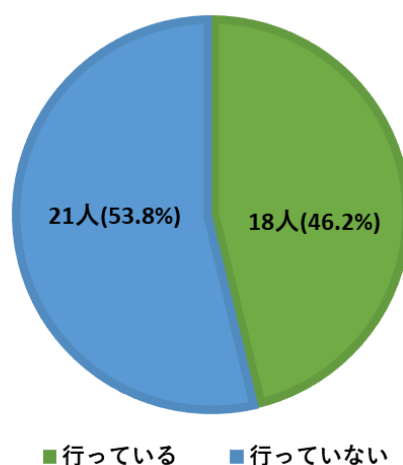


図 4 精神科訪問看護の実践

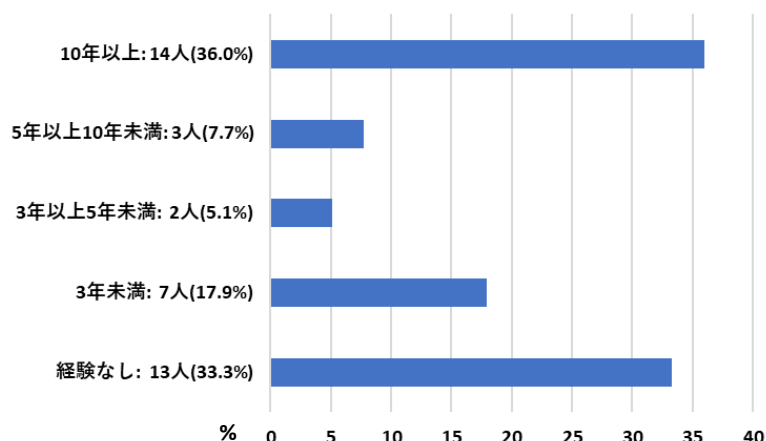


図 5 訪問看護の経験年数

②参加理由・参加後の意見や感想

研修参加の理由は、「テーマに興味があったから」28人（71.8%）、「実際に活用できると思ったから」10人（25.6%）、「無料だったから」1人（2.6%）であった（図 6）。

研修前の期待度は、「とても期待していた」が17人（43.6%）、「期待していた」が21人（53.8%）、「あまり期待していなかった」が1人（2.6%）であった（図 7）。

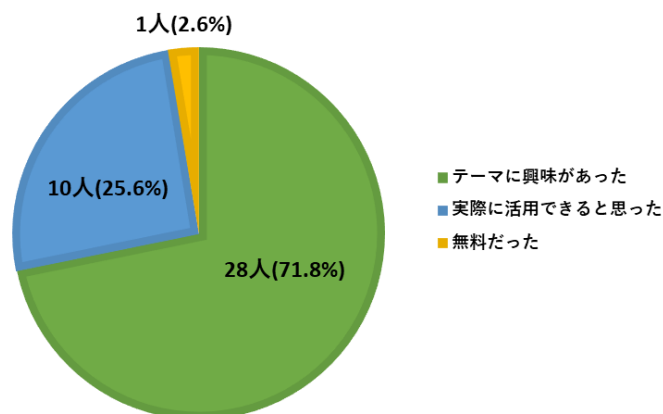


図 6 研修参加理由

研修の満足度は「大変満足できた」13人（33.3%）、「満足できた」25人（64.1%）で、満足できた理由として、「薬の専門家である薬剤師の先生からの講義であり、睡眠薬や抗不安薬の適応やアセスメントを専門家の視点から知れたから」や、「ポリファーマシーで薬剤調整に悩んでいる利用者様や薬を飲んでも眠れない利用様がいたため、アドバイスや提案するのに今回の内容が活かされると感じたから」などが挙げられた。「あまり満足できなかった」の1人（2.6%）

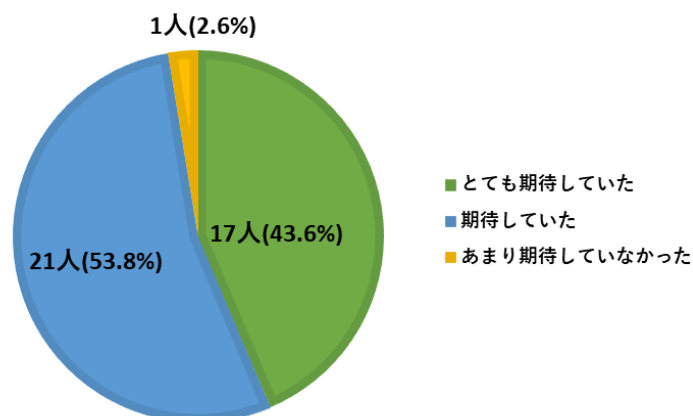


図 7 研修前の期待度

は、「自分が精神科は超初学者であるため、少し難しかった」という意見であった（図 8）。

研修内容の活用は、「大変参考になる」10 人（25.6%）、「参考になる」28 人（71.8%）で、「ベンゾジアゼピン系の抗不安薬や睡眠薬を内服しておられる利用者様に対しどのような視点で観察をし、ケアにつなげていけるか考えるきっかけとなった」などの感想が寄せられた。「あまり参考にならない」の 1 人（2.6%）は、その理由を「研修の内容ほど専門的に薬剤の調整を担ってもらえそうな医師との連携がない」と回答した（図 9）。

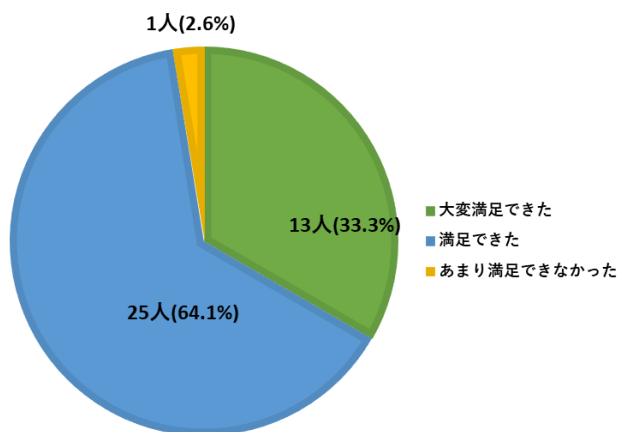


図 8 研修の満足度

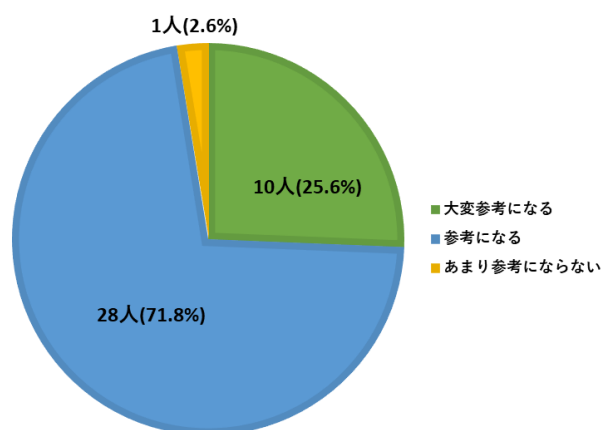


図 9 研修の活用度

③今後の要望

今後の大学への要望について、「精神科訪問看護での内服管理のポイント等を学びたい」や「精神科訪問看護の特徴を学びたい」、「困難事例の対応について学びたい」などの意見が寄せられた。

（２）医療的ケアが必要なこどもを地域で支えよう～訪問看護は何をしてくれるの？～

在宅看護学分野 片倉 直子

1) 背景

医療技術の進歩等を背景として、NICU 等に長期間入院した後、退院後も引き続き人工呼吸器や胃ろう等を使用し、痰の吸引や経管栄養などの医療的ケアが必要な障がい児（医療的ケア児）等が増加している。こうした状況を踏まえ、医療的ケア児等が地域において必要な支援を受けながら安心して生活し続けることができるよう、それらを支援する者を養成するため、国が定めるカリキュラムに基づく研修を実施している。

ただ、どのような医療的ケア児が訪問看護を受けているのか、また医療的ケア児への訪問看護に必要な準備など、わかりにくいことも多いと考えられる。医療的ケア児のケアを

している家族の中には、訪問看護が何をしてくれるのか、どの時期に依頼したらよいか十分知らないことが考えられる。

2) 事業内容・経過

実際に、医療的ケア児に訪問看護を専門的に提供している訪問看護事業所の管理者が、訪問看護を受けている医療的ケア児の実際と、提供している看護の内容を、具体的に紹介する研修を企画・実施した。この研修により、訪問看護やサービスを提供するその他の専門職は、医療的ケア児への訪問看護内容を具体的に理解し活用することができ、医療的ケア児の家族などは社会資源としての訪問看護を知るきっかけとなることを期待した。

日時：2025 年 2 月 15 日（土）14：00～16：00

方法：ZOOM によるオンラインライブ研修

講師：萩岡あかね先生（ありす訪問看護神戸ステーション管理者 小児看護専門看護師）

3) 業務成果・実績

①研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

本研修は、訪問看護事業所の看護師・リハビリテーション従事者、医療的ケア児への支援を考えている事業者、小児科の病院看護師、訪問看護の利用を検討中の方、医療的ケア児への支援に関心がある専門職・行政学校関係者・ご家族・看護学生等を対象として参加を募集した。

事前参加申込みは 84 人、当日の参加は 58 人であった。参加者の勤務先所在地域は兵庫県内が 42 人（72.5%）で、内訳は神戸市が 25 人（43.1%）と最も多く、次いで阪神南が 8 人（13.8%）、西播磨が 4 人（6.9%）、東播磨と但馬がそれぞれ 2 人（3.5%）、阪神北が 1 人（1.7%）であった。兵庫県外の参加者は 12 人（20.7%）で、関西近府県その他北海道、北陸、関東、四国、九州地区からも参加があった（表 1）。

参加者の所属機関は、医療機関（病院、クリニック、訪問看護ステーション、助産院）、教育機関（支援学校、小学校、大学）、保育機関（こども園、保育園）、行政機関（健康福祉事務所、教育委員会）、職能団体など、多岐にわたった。

研修後に実施したアンケートの回答者は 34 人（回答率：58.6%）で、回答者の勤務先所在地域は「神戸市内」が 14 人（41.2%）、「神戸市以外の兵庫県内」が 10 人（29.4%）、「兵庫県外」が 10 人（29.4%）であった（図 1）。

アンケート回答者の所属機関は、医療機関（病院）と教育機関（大学、専門学校）がそれぞれ 7 人（20.6%）と最も多く、次いで、訪問看護ステーションが 6 人（17.6%）、教育機関（小/中/高/支援学校）が 5 人（14.7%）、保育機関（保育園、幼稚園、こども園、デイサービス）が 4 人（11.8%）、行政機関が 3 人（8.8%）、その他が 2 人（5.9%）で、その他の内訳は職能団体と助産所であった（図 2）。

表 1 参加者の勤務先所在地域

	人数	%
兵庫県内	42	72.5
神戸	25	43.1
阪神北	1	1.7
阪神南	8	13.8
東播磨	2	3.5
西播磨	4	6.9
但馬	2	3.5
兵庫県外	12	20.7
北海道	1	1.7
新潟	2	3.5
東京	1	1.7
神奈川	1	1.7
石川	1	1.7
大阪	2	3.5
京都	1	1.7
奈良	1	1.7
香川	1	1.7
福岡	1	1.7
不明	4	6.9
計	58	100.0

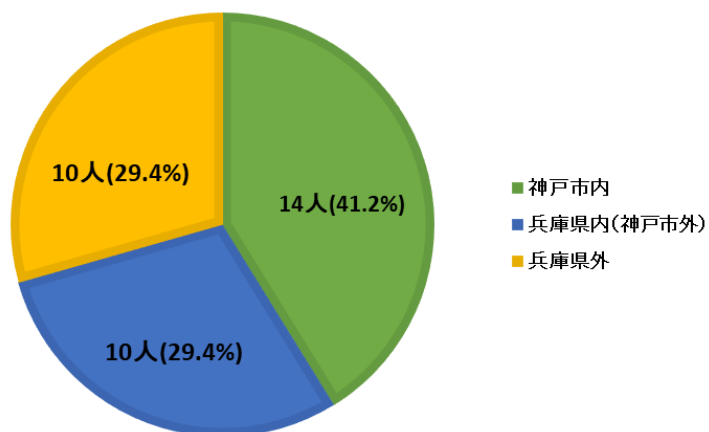


図 1 アンケート回答者の勤務先所在地域

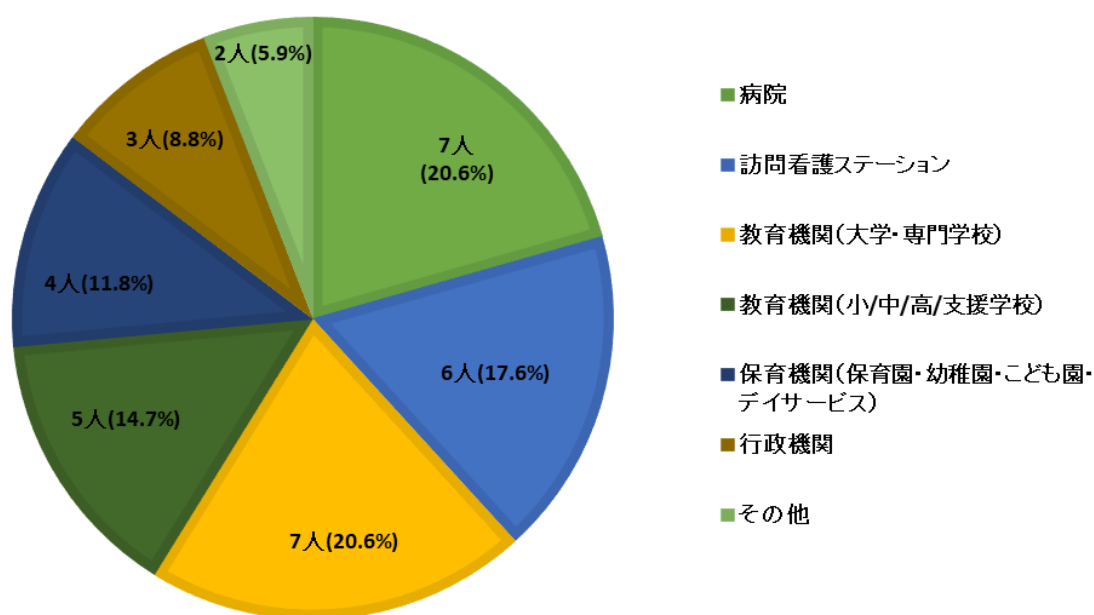


図 2 アンケート回答者の主な所属機関

回答者の主な職種は、「看護師」が最も多く 18 人（53.0%）、次いで「助産師」と「教員」がそれぞれ 4 人（11.8%）、「保健師」と「理学療法士」がそれぞれ 2 人（5.9%）、「社会福祉士・精神保健福祉士」、「栄養士」、「法人理事」、「学生」がそれぞれ 1 人（2.9%）であった（図 3）。

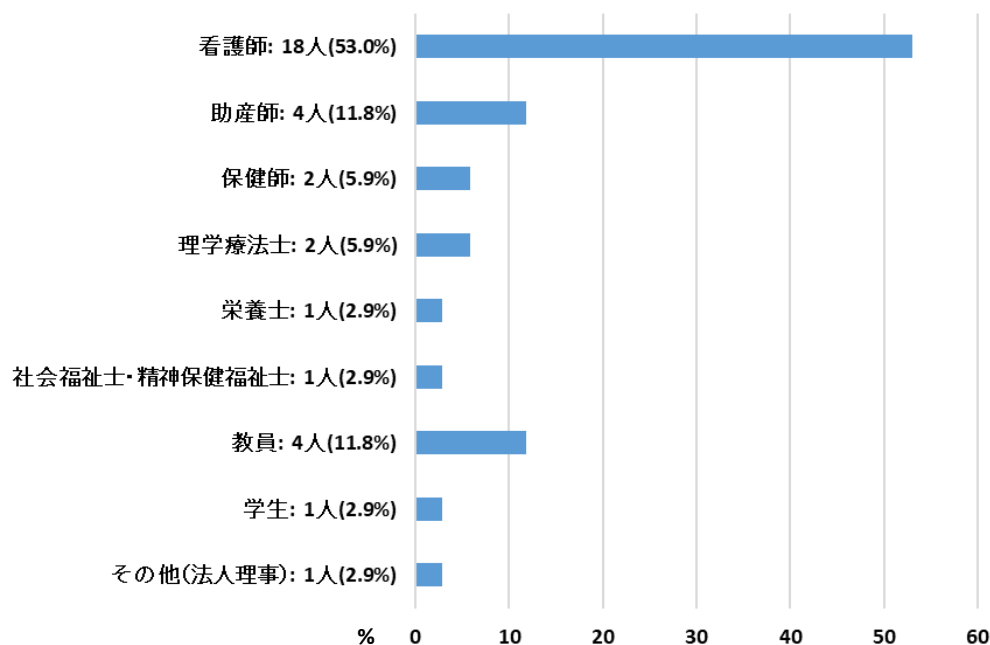


図 3 アンケート回答者の主な職種

訪問看護の経験年数は「10 年以上」が 1 人（2.9%）、「5 年以上 10 年未満」と「3 年以上 5 年未満」がそれぞれ 3 人（8.8%）、「3 年未満」2 人（5.9%）、「該当（経験）なし」25 人（73.6%）であった（図 4）。

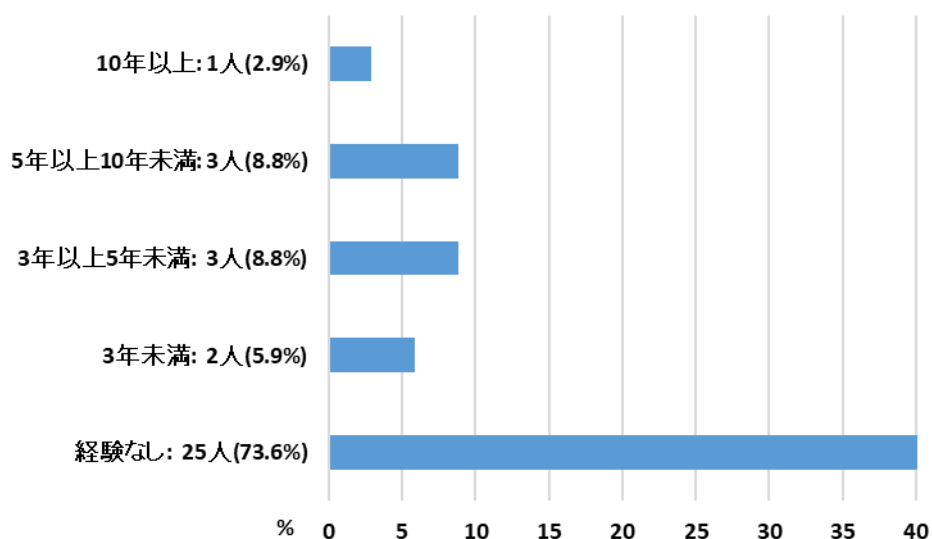


図 4 アンケート回答者の訪問看護の経験年数

回答者と医療的ケアが必要なこどもの関わりは、「医療機関で実際にケアをしている」が 7 人 (20.6%)、「訪問看護で実際にケアをしている」が 3 人 (8.8%)、「学校で実際にケアをしている」が 4 人 (11.8%)、「保育機関で実際にケアをしている」が 3 人 (8.8%)、「行政機関などで制度づくりや環境整備をしている」が 3 人 (8.8%)、「その他の活動（医療的ケア児コーディネーター・子育てサークル協働主催など）に関わっている」が 5 人 (14.7%)、「現在関わりがない」が 2 人 (5.9%)、「今後ケアをしたいと思っている」が 7 人 (20.6%) であった（図 5）。

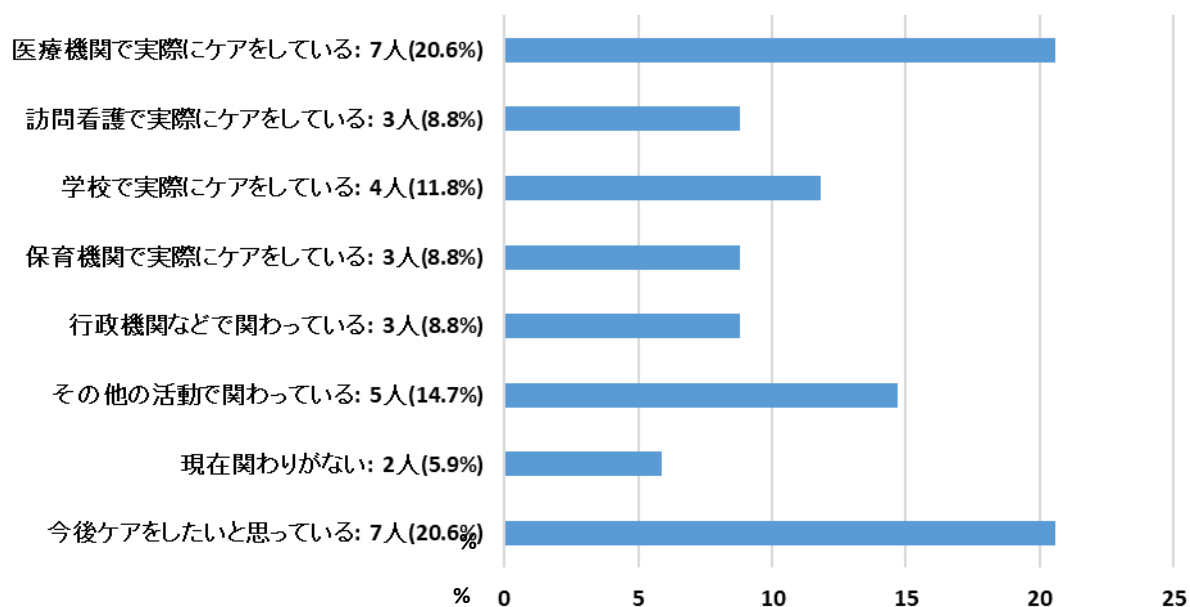


図 5 アンケート回答者の医療的ケア児との関わり

②参加理由・参加後の意見や感想

研修参加の理由は、「テーマに興味があったから」31 人 (91.2%)、「実際に活用できると思ったから」3 人 (8.8%) であり、研修のテーマに高い関心をもつ参加者が多かったことが窺えた（図 6）。研修前の期待度は「とても期待していた」が 16 人 (47.1%)、「期待していた」が 18 人 (52.9%) であった（図 7）。

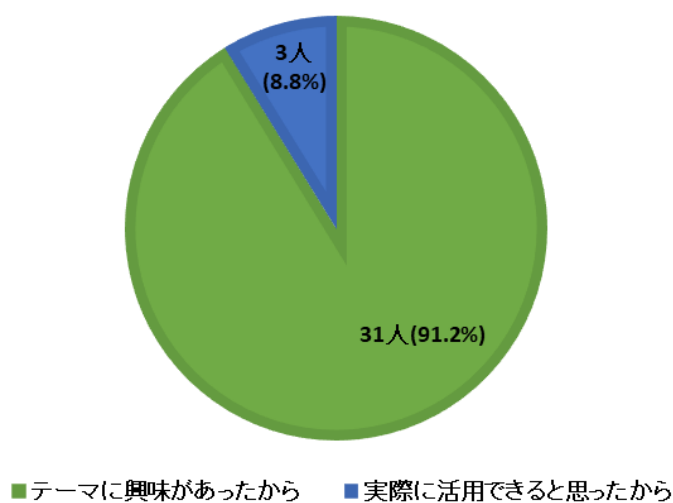


図 6 研修参加理由

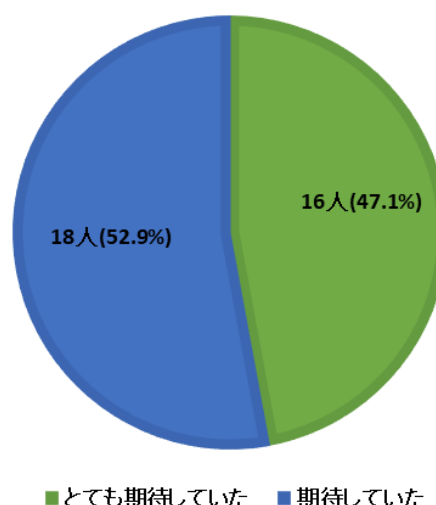


図 7 研修前の期待度

研修の満足度は「大変満足できた」15 人（44.2%）、「満足できた」18 人（52.9%）で、満足した理由は、「病院で子どもたちをケアする看護師として、地域との連携のために必要な視点が得られた（病院：看護師）」や、「退院時にどんな情報を病院から得たら良いのか、他機関の名称やどんな役割か、どんな連携をしたら良いのかを知ることができた。また事例から様々なケースに対し、実際に行った対応や結果を伺うことで、訪問看護ですぐ生かせそうな内容だった（訪問看護ステーション：看護師）」などが挙げられた。「あまり満足できなかった」の 1 人（2.9%）は、「小児看護について看護目標に対する具体的な関わりについて理論をもとに紹介頂ければ良かった」という意見であった（図 8）。

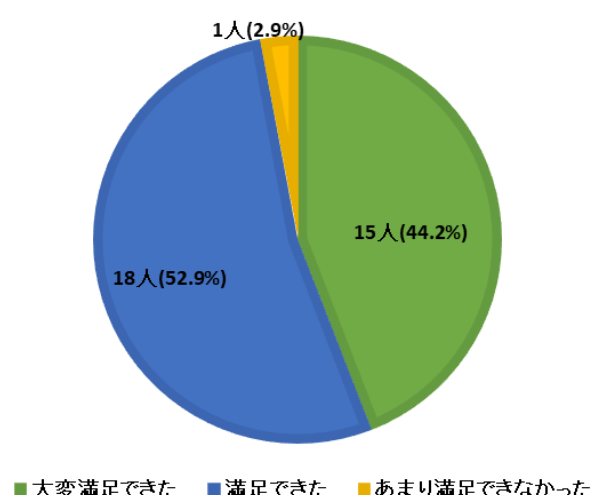


図 8 研修の満足度

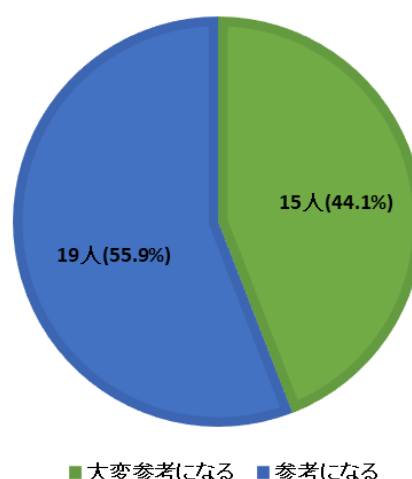


図 9 研修の活用度

研修内容の活用は、「大変参考になる」15 人（44.1%）、「参考になる」19 人（55.9%）で、「特別支援学校で医療的ケアが必要な子供たちに携わっているが、こどもたちの自宅での生活の様子、家族の悩みや不安、また訪問看護師や他の関係機関がどのように関わっているか等をイメージすることができた（支援学校：看護師）」や、「現在勤務している事業所を利用する児童をみる視点や、訪問看護や学校と連携していく中でどのように関わっていけばいいかがわかり、学びを活かしていきたいと思った（保育機関：看護師）」などの感想が寄せられた（図 9）。

③今後の本学への要望

「在宅ケアに関するネットワークづくりの支援」「医療的ケア児の支援や多職種協働への取り組み・家族の支援」「事例検討会の開催」等の要望が寄せられた。

(3) 訪問看護師を支援する研修内容の検討

在宅看護学分野 丸尾 智実

1) 背景

急速な少子高齢化を背景に、地域包括ケアシステムの推進が求められており、その中で訪問看護師が果たす役割が期待されている。一方で、訪問看護師の離職率は病院よりも高いことが指摘されており、訪問看護師の定着に向けた支援が必要であると考えられる。また、開設期間が長く常勤換算看護職員数が多い訪問看護ステーションでは新規採用者への教育体制が充実している一方で、そうでない訪問看護ステーションへの教育支援の必要性も指摘されている。

このような背景を踏まえ、病院等での勤務経験の後、訪問看護ステーションで勤務する訪問看護師（以下、新任訪問看護師）を対象とした訪問看護実践力向上プログラムを開発することを目的に研究に取り組むことにした。また、研究をおこなうために、2023 年度になな一る訪問看護研究助成プロジェクトに応募して、採択された。

2) 事業内容・経過

今年度は、なな一る訪問看護研究助成プロジェクト助成金を活用して、訪問看護ステーション（以下、訪看 ST）の管理者が新任訪問看護師に獲得を期待する入職後 1 年間の訪問看護実践力を明らかにすることを目的に研究に取り組んだ。

研究デザインは、半構造化インタビューを用いた質的記述的研究とし、研究参加者は、新任訪問看護師を採用した経験のある管理者経験 5 年以上の訪看 ST の管理者 5 名とした。主なインタビューの内容は、新任訪問看護師に獲得を期待する入職後 1 年間の訪問看護実践力とし、分析は、研究参加者の許可を得てインタビュー内容を IC レコーダーに録音して逐語録を作成し、コード化、カテゴリ化した。

3) 事業成果・実績

研究の結果、訪看 ST の管理者が新任訪問看護師に獲得を期待する入職後 1 年間の訪問看護実践力には、【訪問看護に必要な対人スキルと初めての在宅でのルールへの適応力】や【訪問看護制度や社会資源に関する基礎的な知識力】、【対象者に合わせて日常的な看護技術を提供する力】等の 10 の実践力が抽出された。

なお、本研究の結果は、第 30 回日本在宅ケア学会で発表する予定である。

4) 来年度の展望

本研究の成果を用いた新任訪問看護師を対象とした研修プログラムの開発に向けて、引き続き検討していく。

Ⅶ オンライン看護相談グループ

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川 真理子
公衆衛生看護学分野 岩本 里織

1. グループの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの健康支援グループは、2021 年度に神戸市からの委託を受け、「オンライン健康相談(看護相談)」事業と「オンラインナーシングによる慢性疾患重症化予防」事業を担いプログラムやシステムの開発と展開を行った。委託期間を終えた 2023 年度からは大学の事業として、オンラインを活用した看護を継続している。

コロナ禍において、地域住民は、受診や健康診断、訪問・通所サービスなどを控える傾向があり、慢性疾患の重症化や、介護負担の増加、子育て期の母親のストレスの増加などさまざまな健康課題を抱えていた。本学は、コロナ禍における地域貢献活動として、2020 年度に、オンライン保育やオンラインもの忘れ看護相談などを開催し、ICT を用いた看護の展開をいち早く取り入れてきた。2021 年度からは、神戸市の委託事業の一環として、ICT を用いた看護を開発・展開し、2023 年度からは、大学の事業として活動を継続している。ポストコロナの時代においても医療アクセスの改善手法である遠隔医療の普及や発展は欠かせない。デジタル化社会の中で看護が果たせる役割を明らかにするために、オンラインを活用した看護技術の開発と展開を行いその効果を検証する。

2. オンライン健康相談(看護相談)班メンバー

リーダー 岩本里織

メンバー 坪井桂子、林千冬、井上理絵、片山修、畑中あかね、水川真理子、
山下正、藤本佳子、遠藤真澄、関口瑛里、山田暢子、勝田玲子

3. オンライン健康相談(看護相談)の実績

(1) 事業概要

2020 年 2 月頃からの新型コロナウイルス感染症(以下、コロナ)の大流行により、人々は医療機関・介護施設への通院・通所を控え、健康支援・地域連携活動、医療講演会や患者同士の情報交換・経験交流を行う患者の会、子育て支援サークルなど、地域福祉において重要な役割を担っていた活動が困難となり、病状の重症化や介護度の重度化、漠然とした不安の増大、コミュニケーション不足による孤立化など、健康リスクの増大が生じた。2023 年 5 月にはコロナは 5 類感染症に移行し、人々の生活はコロナ前に戻ってきているが、コ

コロナの流行によって、人々の ICT（情報通信技術）の利用状況は増大し、オンラインによる医療機関の診療などが行われたり、オンライン会議の開催など多様な場面において、ICT が活用されるようになってきた。スマートフォンの所有率は 79.7%（令和 2 年通信利用動向調査／世帯構成員層、総務省）であり、これは 13 歳から 50 歳代は 90%以上であるが、60 歳代 79.5%、70 歳代 48.4%である。一方、インターネットの利用率も 83.4%であり（令和 3 年版情報通信白書、総務省）、13 歳から 50 歳代では 90%以上、60 歳代 82.7%、70 歳代 59.6%である。このように多様な世代が、ICT の活用をしている。

(2) 2024年度の主な活動

参考：オンライン看護相談のチラシ

38

(3) 相談実績

1) 相談実績

2021 年 12 月から健康相談（看護相談）を実施している。2024 年 4 月から 2025 年 3 月までの相談人数は 9 人で延べ相談件数は 16 件で、一度相談した方が繰り返し利用されることが多かった。相談実績を表 1 に示す。

表 1 令和 6（2024）年度オンライン健康相談（看護相談）実績

相談受付	新 規			終 了		継 続 中	
	新規登録	相談者数	相談件数	終了者数	終了件数	継続者数	継続件数
4月	1	1	1	2	2	7	7
5月	0	0	0	3	3	4	4
6月	0	1	2	2	3	3	3
7月	1	2	2	2	2	3	3
8月	0	0	0	1	1	1	1
9月	1	2	2	2	2	1	1
10月	1	1	1	1	1	1	1
11月	1	3	4	2	3	2	2
12月	1	1	1	1	1	2	2
1月	0	0	0	0	0	2	2
2月	0	0	0	0	0	2	2
3月	2	3	3	2	2	3	3

2) 相談者の概要

相談者の概要を表 2 に示す。2024 年 4 月から 2025 年 3 月までの相談者の総数は 9 人で、性別は、男性が 5 人（55.6%）、女性が 4 人（44.4%）であった。2024 年度の相談者の年代は、50 歳代が 3 人（33.4%）と最も多く、次いで 30 歳代 2 人（22.2%）、20 歳未満、20 歳代、50 歳代、70 歳代がそれぞれ 1 人（11.1%）で、40 歳代以外の各世代から相談があった。居住地別では大学が所在する西区が 5 人（55.6%）と最も多く、次いで東灘区が 2 人（22.2%）で、兵庫区と神戸市以外からの相談者がそれぞれ 1 人（11.1%）であった。

表 2 相談者の概要

性別	2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	人	%	人	%	人	%	人	%
男性	5	45.5	5	31.3	1	6.7	5	55.6
女性	6	54.5	11	68.8	14	93.3	4	44.4
計	11	100.0	16	100.0	15	100.0	9	100.0

相談者の年代

年代	2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	人	%	人	%	人	%	人	%
70－79歳	0	0.0	2	12.5	2	13.3	1	11.1
60－69歳	1	9.1	4	25.0	3	20.1	1	11.1
50－59歳	4	36.3	3	18.8	1	6.7	3	33.4
40－49歳	2	18.2	4	25.0	2	13.3	0	0.0
30－39歳	2	18.2	2	12.5	2	13.3	2	22.2
20－29歳	1	9.1	1	6.2	5	33.3	1	11.1
20歳未満	1	9.1	0	0.0	0	0.0	1	11.1
計	11	100.0	16	100.0	15	100.0	9	100.0

相談者の居住地

地区	2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	人	%	人	%	人	%	人	%
西区	4	36.4	5	31.2	4	26.7	5	55.6
東灘区	3	27.2	5	31.2	1	6.7	2	22.2
長田区	0	0.0	1	6.3	1	6.7	0	0.0
中央区	1	9.1	2	12.4	1	6.7	0	0.0
垂水区	1	9.1	0	0.0	1	6.7	0	0.0
兵庫区	1	9.1	1	6.3	0	0.0	1	11.1
須磨区	0	0.0	1	6.3	2	13.3	0	0.0
灘区	0	0.0	1	6.3	3	19.9	0	0.0
その他	1	9.1	0	0.0	2	13.3	1	11.1
計	11	100.0	16	100.0	15	100.0	9	100.0

3) 相談内容

相談内容を表 3 に示す。相談内容は、「病気や受診などに関する相談」が 11 件 (68.7%) と最も多く、次いで「こころの悩みに関する相談」が 2 件 (12.4%)、「健康づくりや健康に関する相談」が 1 件 (6.3%)、「介護予防・介護・認知症などに関する相談」が 1 件 (6.3%)、「子育てや妊娠などに関する相談」が 1 件 (6.3%)、「その他」が 1 件 (6.3%) であった。

相談内容をみると、例年どおり、医療機関への受診に関する相談が最も多く、症状があるが医療機関を受診した方が良いか、受診するなら何科が良いか」という相談の他に、すでに医療機関に受診して処方されたが、症状が継続していることに対し、その対応や医療機関の受診の必要性について判断を求める相談がみられた。一方で、メンタルヘルスに関する相談は 2 件、健康づくりや、認知症予防、子育て、メンタルヘルスに関する相談はそれぞれ 1 件ずつに留まった。相談件数は、微減しているものの、相談内容が深刻なものが多くなっており、時間をかけて丁寧に対応を行っている。

表 3 相談内容

相談内容

相談内容	2021年度		2022年度		2023年度		2024年度	
	件	%	件	%	件	%	件	%
病気や受診などに関する相談	6	42.9	11	50.0	11	57.9	11	68.7
健康づくりや健康に関する相談	4	28.6	6	27.3	3	15.8	1	6.3
こころの悩みに関する相談	2	14.3	3	13.6	2	10.5	2	12.4
介護予防・介護・認知症などに関する相談	0	0.0	1	4.5	0	0.0	1	6.3
子育てや妊娠などに関する相談	0	0.0	1	4.5	2	10.5	1	6.3
感染症（新型コロナ/海外渡航関連感染症）	2	14.3	0	0.0	1	5.3	0	0.0
計	14	100.0	22	100.0	19	100.0	19	100.0

(4) 相談者のアンケート結果

相談件数 16 件のうち、アンケートに回答したのは 9 件 (56.3%) と半数であった。オンライン看護相談について知った理由は、インターネット検索が 7 件 (77.8%)、ちらし、広報がそれぞれ 1 件 (11.1%) であった。

オンライン相談を利用した動機は(複数回答式)、「オンラインで気軽に相談できるから」「匿名で相談できるから」「看護大学が実施しているため信頼できるから」がそれぞれ 6 件 (66.7%)、「無料だから」「他に相談できるところがなかった」がそれぞれ 4 件 (44.4%) であった。利用者は、オンラインで気軽に相談できるという利便性を感じていること、匿名性や看護大学が実施しており信頼できることなどから相談につながっているようである。

相談により課題解決や示唆が得られたかについての問いは、全員が「得られた」か「まあ得られた」と回答した。オンライン健康相談を再度利用する可能性は全員があると回答し、オンライン看護相談の回答者の対応は全員が良いと回答した。

オンライン看護相談に対する満足度 (10 段階) は、最も高い「10」が 4 件 (44.4%)、「9」が 1 件 (11.2%)、「8」が 4 件 (44.4%) で非常に満足度が高かった。

以上の結果より、オンライン看護相談を活用した者にとって、相談者のニーズにあった

回答ができており、課題の解決につながる満足度の高い相談ができていたと考える。

（５）まとめと今後の展望

2021 年 12 月から 2025 年 3 月現在、オンライン看護相談を継続実施している。2024 年度の相談件数は前年度までと比べて横ばいであったが、利用者数は減少した。西区を中心に大規模にチラシを配布した後など PR 後には相談がみられていたが、今年度の相談者数の伸びはみられなかった。今後は西区以外の広報の拡大を検討し、相談したくても相談先が分からないといった声に届くような工夫が必要である。

オンライン看護相談の利用者については、非常に高い満足感が得られていると考えられる。一度相談をされた方は、何度も相談を繰り返される方も複数おられ、健康に関するちょっとした悩みを気軽に相談できる場として活用していただいているようである。

オンラインの相談の場の意義としては、市民がちょっとしたことだが気になっている健康の疑問を相談し早期の受診に繋がっていること、あるいは疑問を相談し回答により解決している場合もある。また医療を既に受けているがそれを補佐する情報を得たいと思い相談している場合もある。いずれにしても、市民の健康の保持増進や、疾病の早期発見などに繋がっていると考えられる。

オンライン相談の場としての有効性は高いものの、課題としては、相談数の少なさである。匿名で無料、オンラインで活用できる本相談は、医療や保健へのアクセスが難しい層（例えば、無職者、自営業者、フリーターなど）が、相談しやすい場ともいえると考えられる。そのような方々へオンライン看護相談に関する情報が行き届く方策を検討していきたい。

今後のオンライン看護相談の発展としては、市民がより簡易に相談ができる場として、周知していくことを検討していきたい。

Ⅷ リカレント/臨床連携グループ

小児看護学分野 二宮 啓子

1. グループ概要

本グループは、看護職のリカレント教育と臨床看護職との連携を担当している。
リカレント教育は 2022 年度から実施している。

2. グループメンバー

リーダー 二宮啓子

メンバー 池田清子、澁谷幸、高山良子、内山孝子、岩井詠美、山本陽子、佐藤智夫、
丸尾智実、畑中あかね、後藤由紀子、水川真理子、新澤由佳、石橋信江

3. 2024 年度の活動内容及び結果

(1) 看護専門職講座

2024 年度看護専門職講座「今、看護に必要なこと～92 歳現役看護師からのメッセージ～
(講師：川嶋みどり氏)」を 11 月 7 日(土)に開催し、看護職者等 257 名が参加した。アンケートの回収数(率)は、157 名(61.1%)であった。参加者の満足度は、とても満足した(87%)とまあまあ満足した(12%)を合わせて 99%であった。自由記載では、満足した理由として、「看護の力/本質/原点/魅力等を再認識した」、「今後のモチベーションになった」、「看護への熱意に感銘を受けた」、「触れるケア(て・あて)手の重要性を再認識した」「わかりやすく貴重なよいお話が聴けた」等であった。また、役に立ったことや役立ちそうなこととして、「看護の原点を忘れず看護の力を信じ發揮したい」、「手による触れるケアを実践する」、「気持ちの良いケアを実践する」「日常生活援助や生活に寄り添った看護を実践する」「人間の尊厳/その人らしく生きる支援をする」「看護教育に活かしたい」等で、好評であった。

(2) 兵庫県看護協会と連携した新人看護師育成に関する支援

2024 年度は兵庫県看護協会を介しての新人看護師教育の支援依頼はなかった。

(3) 神戸市民病院機構と本学の相互連携システム構築の促進

西神戸医療センターの 2024 年度看護職員研修への支援として、4 月、5 月、8 月(2 回)、10 月の計 5 回の本学実習室(Ⅲ、Ⅳ)の貸し出し、事前打ち合わせや会場・物品の手配を行った。受講生・指導担当者から、「大学の実習室は病室の環境のようで臨場感が

あった」や「病院から離れて別の場所で研修することで研修に集中できた」等の感想を頂いた。

市民病院機構の看護部長、教育担当副部長と本学教授との会議を5月・9月・11月にオンラインで開催し、卒業生の適応状況や看護職者の大学院進学状況等の情報共有を行うとともに、大学に対する各病院のニーズを把握し人事交流の方法を探ったが、具体的な検討までには至らなかった。

また、神戸市立病院紀要の編集委員として、編集委員会（12月18日）に出席した。

看護系教員の臨床研修制度の利用者はいなかった。教員の欠員や休職者が複数人いたことから、利用者を増やすことはできなかった。

（４）リカレント教育

プログラムのテーマは「きらり、看護の魅力を再発見」、プログラムの構成は必須1科目、選択7科目とした。また、持続可能なプログラムを目指し今年から有料化（8000円）した。募集20名に対し受講生19名であった。受講生は平均年齢41歳（24～60歳）、市内在住78%、就業先が市内73%、正規就業58%、勤務先が病院58%、半年以内あるいはいつか転職希望が47%であった。今年は、12月に入りインフルエンザやCOVID-19等の感染症の流行があったためプログラムの後半では欠席せざるを得ない方もおられた。

今年の修校式はハイブリッドで開催したが、教室の参加者とオンラインでの参加者同志がつながり、心温まる時間となった。

＜成果＞

受講後のアンケート（回答者6名）では、「転職・就職への意欲向上につながった・看護への自信につながりましたか」の質問への回答が[大変そう思う・そう思う]あわせて100%であった。自由記載では「いろいろな分野の看護の仕事をしてみたいと思うようになった」という就職や転職への思いの変化や「自信のない科目も理解できた」「実技もあり受講生同志でディスカッションできたので、自分1人でもやってみたい」など看護への自信が高まったこと、さらに「やっぱり看護っておもしろい！看護の力は無限と思えた」と看護へのやりがいや再発見する経験をされていたことがわかった。また、非正規雇用、休職中（2名）の方がハローワークや転職・就職サイトへの登録を行っていたことから本プログラムの受講が転職や就職のきっかけになっていたと考えている。

＜課題＞

今後の課題としては、引き続き、1）受講生が働きながら学べるよう時間割や方法を工夫すること、2）転職・就職を含めた受講生のキャリア支援を継続する機会を設けること、3）リカレント教育を持続可能なプログラムにするための有料化の方法を検討することである。

IX 国際交流グループ

災害看護・国際看護学分野
急性看護学分野

神原咲子
森山美香

1. グループ概要

国際交流グループは、学術協定や海外の大学との交流等の企画・運営を担当している。学術協定については、今年度はベトナム・ダナン大学との学術協定（MOU）の更新、台湾・台北護理健康大学との MOU を締結し、連携校が増えた。「海外看護学研修」については、本学と学術協定を締結している米国ワシントン大学（シアトル）において、2 週間のプログラムで学生らが現地に赴いて見学・視察や語学研修、看護演習を含めて自分の目で見たり聞いたり触れたりするという形で海外を経験することができた。危機管理マニュアルの見直しを昨年度に続き行った。一方、ベトナム・ダナン大学については、昨年度に引き続き、オンラインセミナーという形で実施した。コロナ禍を経てもオンライン形式のニーズがあり、オンラインとオフラインでの授業での国際交流、課外の English Extra、海外大学の講師による講演、外国人留学生の受け入れ体制整備などを含めた多様な国際交流を展開できた。

以下に、2024 年度国際交流グループの活動の詳細を報告する。

2. グループメンバー

リーダー 神原咲子、森山美香

メンバー 高木廣文、林 千冬、山内理恵、クロスビ・アダム、佐藤隆平、神谷訓康、城田純平、田中晴佳、井上理絵、水川真理子、藤本佳子、樋口佳耶

3. 今年度の実施内容及び実施結果

（1）学術協定の更新手続きとあらたな協定に向けた活動

本学の学術協定（MOU）提携校の一つであるベトナム・ダナン大学との協定を 2025 年 3 月に更新した。

台湾・台北護理健康大学と MOU を 2024 年 9 月にオンラインにて締結し、次年度は台北護理健康大学で開催されるサマーセミナーへの参加を計画した。

英国・ダービー大学との協定と学術交流に向けて、オンライン及び対面にて議論を実施した。MOU の締結および 2025 年度の共同研究の実施について審議が進み、承認された。

韓国・大邱保健大学との MOU の締結については、2024 年 12 月 16 日に本学へ学生 20 名と教員 5 名（看護学科の教員はなし）が来学された際に、教育の現状や大学経営に関する情報交換を行い、次年度以降に具体的な内容を検討することとなった。



写真 台湾・台北護理健康大学とのオンラインによる MOU 締結式

（２）ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流会

2025 年 1 月 6 日、神戸市看護大学（KCCN）はダナン大学（UD）と、「プラネタリーヘルスとウェルビーイング」をテーマにオンラインセミナーを開催した。このセミナーには、両大学の教員や学生など約 130 名が参加し、人間の健康と地球の健康のつながりに焦点を当てながら、世界的に重要な環境問題や健康課題について議論を行った。セミナーでは、両大学の学生と教員が、気候変動や環境の持続可能性、それらが人々や看護に与える影響といったテーマについて発表を行った。発表では、環境、社会、医療の観点を統合した幅広いアプローチで健康問題への取り組みの必要性が示された。また、環境破壊がもたらす健康リスクを軽減するための新しいアイデアや方法が紹介され、看護師がこれらの課題にどのように貢献できるかについての発表があった。各発表後には質疑応答が行われ、学生間での意見交換も行った。このセミナーは両大学の研究、教育プロジェクト、学生交流を通じた継続的な連携の一貫であり、本学とダナン大学のより強固な関係構築に向けた重要な一歩となり、両機関の今後の協力をさらに促進する基盤を築き、今後の協力関係をさらに発展させることが期待される。

（３）企業との連携

2023 年度に関東中部ブロックで災害派遣医療チーム (Disaster Medical Assistance Team: DMAT) 訓練で遠隔災害トライアルを実施した結果を踏まえて、2024 年度は改善点について Vittars 社（旧 T-ICU）と検討した。また、2025 年度の研究計画書の作成に向けて、今年度は遠隔 ICU における被支援看護師の不安や離職率、エンパワメントなどに関する研究実施のための打合せを実施し、連携を図っている。

（４）日本で働く外国人看護師のキャリアの探究

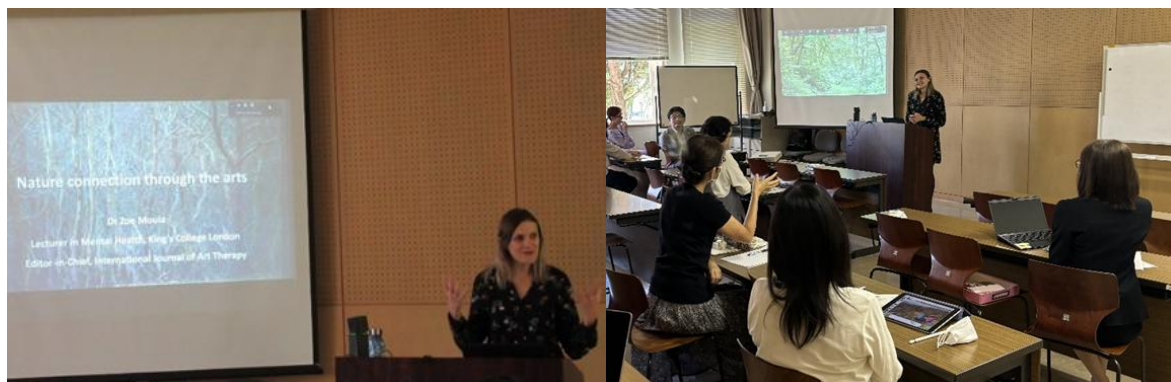
外国人のキャリア開発におけるニーズに応える講座の実施に向けて、「外国人介護職の見た日本の介護」と題した研究会への参加、外国人介護職が働く施設へのヒアリング、EPA の国家試験対策を行う講師へのヒアリングなどを行い、キャリア開発ニーズに関する情報収集を行い、進学やデジタル化に関する講座のニーズがあることを確認した。

(5) English Extra

「English Extra!」は前期・後期を通して水曜日の昼休み 12 時 30 分から 13 時まで、アダム・クロスビー准教授を中心に本棟 3 階のオープンスペースで開催した。開催回数は 27 回で、教員および学生を合わせて延べ参加者数は 135 人であった。また、Moodle を用いて英語学習のためのアドバイスの他、医療系の英語動画やネイティブ教員による英語のコメントを掲載し、学内の多様な方々にこの活動に参加してもらえるよう工夫している。

(6) 海外大学の講師による講演

2024 年 10 月に Kings College of London (メンタルヘルス学科) の講師である Zoe Moula 先生を招いて、「Nature connection through the arts: Examples from research and practice in the UK」というテーマでアートセラピーに関するセミナーをハイブリッドで開催し学内外の大学院生と教員が 23 名参加した。事後アンケートでは全員が満足したと回答した。講師の専門分野は異なるが、看護に関連する課題であり、参加者の異文化への理解やグローバルな視点を育む機会を提供できた。



(7) 異文化交流の推進

新年度のオリエンテーションにおいて、海外研修の経験を、研修に参加した学部生が未参加の学部生に話す機会を設け、関心を持ってもらうことができた。今年度もシアトルを訪れた際に現地の大学生らと交流する機会があり異文化交流が推進された。国際看護論の「異文化と国境を越えた看護」の授業において、オンラインで海外の看護学生と交流・議論した。

広報活動では、昨年リニューアルされたホームページにおいて、海外からのアクセスに対応するため英語版を一部設けて、随時、情報を掲載した。英語版のホームページについて、今年度は 2025 年 1 月の時点で 650 件のアクセスがあった。

(8) 外国人留学生の受け入れ体制整備について

兵庫県立大学の国際交流に携わっている教員および事務担当者から、担当業務、手続き、サポート内容などについて、情報収集を行い、体制整備に向けた準備を進めた。

X 保健師キャリア支援センターグループ

公衆衛生看護学分野 岩本 里織

いちかんダイバーシティ看護開発センター 藤本 佳子

1. グループ概要

保健師キャリア支援センターは 2021 年 4 月に設置され、事務局を本学が担っている。主な活動内容は、兵庫県保健師人材育成ガイドラインに基づく人材育成研修や、キャリアアップを図るための相談・支援、保健師活動に関する調査研究や情報発信等、地域で活動される保健師の方々の資質向上につながる様々な取り組みを行っている。

2. グループメンバー

リーダー 岩本 里織

メンバー 藤本 佳子、山下 正、山田 暢子、遠藤 真澄

3. 今年度の活動内容と実績

(1) 保健師人材育成研修

1) 新任期保健師研修会

①前期Ⅰ研修（オンライン研修）

1 年目相当（個別支援）

日時：2024 年 5 月 16 日（木） 9:30～12:00

内容：講義「個別支援」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉 比佐子 氏

講義「個別支援としての家庭訪問（1 年目）」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課

参加者数：81 名（新任期保健師 71 名、聴講者 10 名）

2 年目相当（地域診断）

日時：2024 年 5 月 21 日（火） 9:30～12:00

内容：講義「地域診断」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉比佐子 氏

講義「地域診断（2 年目）」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課

参加者数：69 名（新任期保健師 62 名、聴講者 7 名）

3 年目相当（地域診断に基づく PDCA）

日時：2024 年 5 月 23 日（木） 9:30～12:00

内容：講義「地域診断に基づく事業計画と評価について」

講師：神戸大学大学院 教授 和泉 比佐子 氏

講義「地域診断に基づく PDCA（事業計画と評価）（3 年目）」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課

参加者数：86 名（新任期保健師 76 名、聴講者 10 名）

②前期Ⅱ研修

1 年目相当（個別支援）

日時：2024 年 9 月 4 日（水） 10:00～16:30

場所：神戸市立中央区文化センター 1 階 多目的ホール

内容：先輩保健師からの講話「2 年目保健師として伝えたいこと」

講師 自治体 2 年目保健師

グループワーク「日頃の活動の振り返り」「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：89 名（新任期保健師 71 名、ファシリテーター18 名）

2 年目相当（地域診断）

日時：2024 年 9 月 18 日（水） 10:00～16:30

場所：神戸市立中央区文化センター 1 階 多目的ホール

内容：先輩保健師からの講話「後輩保健師に伝えたいこと」

講師 自治体 3 年目保健師

グループワーク「日頃の活動の振り返り」「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：74 名（新任期保健師 60 名、ファシリテーター14 名）

3 年目相当（地域診断に基づく PDCA）

日時：2024 年 9 月 20 日（金） 10:00～16:30

場所：神戸国際会館 9 階 大会場

内容：先輩保健師からの講話「新任期保健師に伝えたいこと」

講師 自治体 4 年目保健師

グループワーク「日頃の活動の振り返り」「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：87 名（新任期保健師 70 名、ファシリテーター17 名）

③後期研修

1 年目相当（個別支援）

日時：2025 年 1 月 17 日（金） 10:30～16:00

場所：神戸市立中央区文化センター 1 階 多目的ホール

内容：中堅期保健師からの講話「個別支援の実際」

講師 自治体 中堅期保健師

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：79 名（新任期保健師 62 名、ファシリテーター17 名）

2 年目相当（地域診断）

日時：2025 年 1 月 23 日（木） 10:30～16:00

場所：神戸市立中央区文化センター 1 階 多目的ホール

内容：中堅期保健師からの講話「地域診断の実際」

講師 自治体 中堅期保健師

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：72 名（新任期保健師 59 名、ファシリテーター13 名）

3 年目相当（地域診断に基づく PDCA）

日時：2025 年 1 月 30 日（木） 10:30～16:00

場所：神戸市立中央区文化センター 1 階 多目的ホール

内容：中堅期保健師からの講話「PDCA に基づく保健活動」

講師 自治体 中堅期保健師

グループワーク「課題の取組について共有・意見交換」

参加者数：84 名（内訳：新任期保健師 67 名、ファシリテーター17 名）

2) プリセプター研修会

日時：2024 年 7 月 30 日（火）13:30～16:30

場所：神戸市立中央区文化センター 11 階 会議室 1103+1104

内容：趣旨説明 「新任期保健師現任教育計画の策定と活用について」

講師 兵庫県保健医療部健康増進課

講義「新任保健師の能力を高めるプリセプターシップ～新任期の強みや特性を活かして～」

講師 兵庫大学看護学部 教授 時長 美希 氏

グループワーク「新任期保健師の現状を踏まえたプリセプターとしての支援のあり方」

参加者数：38 名（健康福祉事務所 10 名、中核市 10 名、市町 18 名）

3) 地域ケアの総合調整研修

① 公開講座

日時：2024 年 12 月 19 日（木） 13:30～16:30

場所：神戸市立中央区文化センター 11 階 会議室 1103+1104

内容：講義「地域活動において、科学的手法（調査研究）を用いて疑問や課題を明らかにする必要性とその手法」

講師：武庫川女子大学看護学部 教授 和泉 京子 氏

② 実践報告会

・宍粟市：「いきいき百歳体操自主グループのグループ活動継続の要因」

サポート講師：武庫川女子大学 教授 金谷 志子 氏

・洲本市：「育児中の母親が感じる子育てのしづらさや子育て環境への困難感に関する実態調査」

サポート講師：神戸市看護大学看護学部 講師 山下 正 氏

・加古川健康福祉事務所：「高齢者施設での感染対策の実態とその関連要因～感染症対策の実態が把握できていない高齢者施設への質問紙調査～」

サポート講師：神戸大学大学院保健学研究科

パブリックヘルス領域 教授 和泉比佐子氏

・明石市：「接触者健診結果のデータ分析を活用した対象者選定基準の妥当性の検証」

サポート講師：兵庫県立大学看護学部 助教 島村 珠枝 氏
・明石市：「40 代から始めるフィットネスプログラム」による腹囲、体組成、運動の動機づけへの効果

サポート講師：甲南女子大学看護リハビリテーション学部
准教授 有馬 志津子 氏

③ 課題研修

保健活動における課題や疑問を選定し、科学的手法を用いて課題や疑問を明らかにするための計画書を作成する。計画に基づき調査等を行い、課題や疑問を明確化する。取り組みの成果について学術集会や報告会等の場を活用して公表し、意見交換を行い、成果に基づく方策など現場への活用を提案する。

期間：2023 年度～2024 年度

内容：サポート講師の助言のもと、チームで検討したいテーマに沿って調査や事業の検討を行い、根拠に基づいた保健事業の展開につなげる。

参加状況：5 市 6 チーム

- ①宍粟市：テーマ「高齢者保健」、サポート講師 武庫川女子大学
- ③洲本市：テーマ「母子保健」、サポート講師 神戸市看護大学
- ④加古川健康福祉事務所：テーマ「高齢者の感染症対策」、サポート講師 神戸大学大学院
- ⑤明石市保健予防課：テーマ「結核感染症」、サポート講師 兵庫県立大学
- ⑥明石市健康推進課：テーマ「健康づくり」、サポート講師 甲南女子大学

（２）保健師キャリア支援（再就業支援含む）

１）保健師キャリア相談

県内の保健師（保健師免許保有者）

を対象として、活動に関する具体的な相談（事業、個別支援等）、スキルアップやキャリアラダーに関すること等、保健師活動全般に関する相談窓口を開設している。今年度の相談実績は、表 1 に示す 10 件で、相談内容は、研究に関すること、転職や進学、キャリアアップに関する相談であった。メール、オンライン、対面など相談者のニーズに応じて相談方法を工夫した。必要に応じて相談ができる窓口をさらに周知する必要がある。

表 1 2024 年度 保健師キャリア相談実績

番号	相談方法	相談概要
1	Zoom	今後の就職先について
2	Zoom	今後の就職先について
3	メール	研究と今後の就職先について
4	対面	仕事の継続について
5	メール	文献検索について
6	対面	今後の仕事や進学について
7	対面	就職について
8	対面	今後の仕事や進学について
9	メール	今後の仕事について
10	Zoom	子育てとの両立、キャリア形成について

２）保健師就業・復職支援研修会

日時：2025 年 3 月 7 日（金）13:00～16:30

場所：神戸市立中央区文化センター 会議室 1112

対象：行政保健師として求職中の者

内容：講義「最近の保健・医療・福祉の動向と兵庫県における保健施策について」

講師：兵庫県保健医療部健康増進課

講義「兵庫県における保健師活動」

講師：兵庫県 保健師

講義「神戸市の保健師活動」

講師：神戸市 保健師

講義「市町における保健師活動の実際について」

講師：宝塚市 保健師

現職保健師との座談会

助言者：兵庫県保健医療部健康増進課 保健師

神戸市 保健師

宝塚市 保健師

神戸市看護大学 教員

参加者：37 名（受講者 6 名、聴講者 31 名）

3) オンデマンド研修

①先駆的保健活動の紹介

複数の自治体の活動を取材し、今年度は下記 3 件を保健師キャリア支援センターのホームページに掲載し、県下の自治体に案内した。

A. テーマ：「洲本市の母子保健事業における生活習慣病予防の取り組み」

講師：洲本市 保健師

B. テーマ：「丹波篠山市における愛育班活動の取り組み」

講師：丹波篠山市 保健師

C. テーマ：「宍粟市における実態調査からみえたひきこもり支援体制の構築」

講師：宍粟市 保健師

②新任期保健師研修

A. 課題説明：1 年目～3 年目の課題の取り組み方について

a) 課題説明

(i) 1 年目の課題の取り組み方について

開催日時：2024 年 5 月 16 日（木）

内容：講義「1 年目の課題の取り組み方について」

講師：県庁健康増進課

(ii) 2 年目の課題の取り組み方について

開催日時：2024 年 5 月 21 日（火）

内容：講義「2 年目の課題の取り組み方について」

講師：県庁健康増進課

(iii) 3 年目の課題の取り組み方について

開催日時：2024 年 5 月 23 日（木）

内容：講義「3 年目の課題の取り組み方について」

講師：県庁健康増進課

B. 先輩保健師の講話（2023 年度分を配信中）

a) 2023 年度 新任期保健師への講話（前期Ⅱ）

(i) 1 年目保健師への講話

〈 2023 年 9 月 6 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「2 年目保健師として伝えたいこと」

講師 明石市 2 年目 保健師

(ii) 3 年目保健師への講話

〈 2023 年 9 月 27 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「新任期保健師に伝えたいこと」

講師 丹波健康福祉事務所 4 年目 保健師

b) 2023 年度 新任期保健師への講話（後期）

(i) 1 年目保健師への講話

〈 2024 年 1 月 12 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「個別支援の実際」

講師 宝塚健康福祉事務所 中堅期保健師

(ii) 3 年目保健師への講話

〈 2024 年 1 月 18 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「地域診断の実際」

講師 西宮市 中堅期保健師

c) 2024 年度 新任期保健師への講話（前期Ⅱ）

(i) 1 年目保健師への講話

〈 2024 年 9 月 4 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「1 年目保健師に伝えたいこと」

講師 加古川市 2 年目 保健師

(ii) 2 年目保健師への講話

〈 2024 年 9 月 18 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「2 年目保健師に伝えたいこと」

講師 赤穂健康福祉事務所 3 年目 保健師

(iii) 3 年目保健師への講話

〈 2024 年 9 月 20 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「新任期保健師に伝えたいこと」

講師 尼崎市北部地域保健課 4 年目 保健師

d) 2024 年度 新任期保健師への講話（後期）

(i) 2 年目保健師への講話

〈 2025 年 1 月 23 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「地区診断の実際 ～地区担当保健師として～」

講師 豊岡市 中堅期保健師

(ii) 3 年目保健師への講話

〈 2025 年 1 月 30 日開催の新任期研修での講話オンデマンド研修版 〉

テーマ「PDCA に基づく保健活動の実際～難病保健活動を通じて～」

講師 芦屋健康福祉事務所 中堅期保健師

(3) 公衆衛生看護等に資する調査研究

現在、以下の研究課題の研究に取り組んでいる。

- 1) 保健師のキャリア支援に関するニーズと支援体制に関する研究
- 2) 保健師の産休・育休復帰支援に関する研究

4. 2024 年度の活動の振り返り

兵庫県保健師キャリア支援センターでの取組を開始して4年目となった。今年度は、昨年同様に対面を基本とした人材育成を進めることができた。研修の大枠が定着しつつある中、前年度の課題を反映し内容を工夫しながら研修を実施した。コロナが収束するにつれ、受講生の課題への取り組みに変化があり、提出課題の内容がよくなってきているのが印象的である。

新任期保健師研修会は、昨年度に引き続き、研修課題の実践時間を確保するスケジュール設定及びグループワーク、先輩からの講話を行った。ファシリテーターの支援やグループワークによる多角的な視点の学びや気づきが大きく、満足度が高かった。また、中堅期保健師によるテーマ別の講義は、「個別課題」「地域診断」「PDCA（事業計画と評価）」が一連のつながりを持っていること、研修として取り組んでいることが地域でどのように展開されているのかという具体的な理解につながり、研修課題に取り組む意義の認識につながっていた。

地域ケアの総合調整研修では、公開講座と実践報告会を行い、根拠に基づく保健活動の必要性の理解が深まった。多忙な業務の中でサポート講師による手厚い支援により、学会発表まで進めることができたチームもあり、研究実践への興味につながったといえる。研修参加者や次年度の受講者が6チームに増加し、研修が定着しつつある。研修を通じて、活動の課題を明確化し、行政機関と大学の協働体制の強化につなげていきたいと考える。

保健師就業・復職支援研修会では、短時間、対面とオンラインの併用実施の効果が得られ、参加者の増加につながったと考える。また、講師や助言を依頼した自治体の協力があり、満足度の高い研修となった。引き続き、受講者のニーズに応じた方法を検討し、潜在保健師の就業につなげていきたい。

今年度の全研修において高評価を得た。他県から課題様式の照会があるなど、重要課題である人材育成について、さらなる充実、定着が求められる。そのためには、県内の自治体保健師及び看護系大学教員の協力が不可欠であり、県内全体で人材育成を進めていく機運を一層高め、継続して質の高い研修を実施していくことが重要である。今後は、活動を通じて把握されたニーズをもとに、関係機関とも協議しながら進め、さらに充実した人材育成とネットワークの強化につなげていきたいと考える。

XI コラボカフェ

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子
岩本里織、片倉直子、藤本佳子

1. 概要

1) 概要

本事業は、大学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」として運営しており、現在本学を含めた神戸市内の 8 大学が本事業に参画している。本学は、2012 年にコラボカフェを開設した。名称である「コラボ」は、**Collaboration** の略であり、「大学の教職員と学生が地域住民および関連機関と共に」を意味し、「カフェ」は「子育て中の親子が一休みできる」場として機能することを目指して名づけられている。

2) 目的

コラボカフェは、大学施設を利用した学生と住民の参加を通して親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および学生が生活を支援できる看護職として成長すること、また、それらにより大学の発展に寄与することを目的としている。

3) 実施事業

- a) 子育て親子への場の提供と交流の促進
- b) 子育て等に関する相談、援助等
- c) 地域の子育て関連情報の提供
- d) 子育て及び子育て支援に関する講習
- e) コラボカフェを活用した授業及び研究の実施

4) 運営方法

対象：生後 2 か月かつ、首がしっかりすわってから 3 歳児までの未就園児と、その保護者

開催日時：毎週 火・木・金 9 時 45 分～12 時 15 分、13 時～15 時 30 分

スタッフ：保育士 3 人が見守りを行い、保護者からの相談に応じている。

2020 年より新型コロナウイルスの感染拡大防止のために予約制とし、感染状況に応じた利用人数の制限を行っていたが、2023 年 5 月 8 日より新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが 5 類に移行したため、利用者の人数制限を 1 日 5 組から 15 組に緩和した。その後、2024 年 1 月より予約制と人数制限をふれあい遊び（木曜日午前中）を含むイベント時以外は廃止した。2024 年 5 月からはふれあい遊びの人数制限と予約制を廃止し、季節イベントと外部講師の講演・体験会イベント時のみ人数制限と予約制を敷いている。

2. 実績

1) 開催・利用状況の実績

2024 年 1 月から 12 月末までのコラボカフェの開催日数は 138 日、年間の延べ利用者数は、保護者が 1,336 名、子どもが 1,383 名であった（表 1）。このうち新規登録者は 133 組で、1 日平均利用者数は、保護者が 9.7 人、子どもが 10.0 人であった。経年別では、コロナ禍に一日平均利用者数と新規登録者数は激減したが、人数制限と予約制の撤廃により、2024 年の一日平均利用者数は 10 人まで回復し、新規登録者は横ばい～微減であった（図 1、2）。

表 1 月別の延べ利用者数(人) (2024 年 1 月～2024 年 12 月)

開催月	開催日数	イベント 開催日数	保護者	子ども	新規登録者	学生
1 月	9	4	79	88	11	8
2 月	12	5	124	136	14	1
3 月	7	2	70	78	9	0
4 月	10	3	65	68	10	6
5 月	11	5	119	121	18	5
6 月	14	7	122	122	13	37
7 月	13	9	144	144	6	3
8 月	11	7	95	95	7	3
9 月	12	4	122	125	7	0
10 月	14	5	144	144	12	0
11 月	14	6	154	159	15	2
12 月	11	5	98	103	11	0
計	138	62	1,336	1,383	133	65

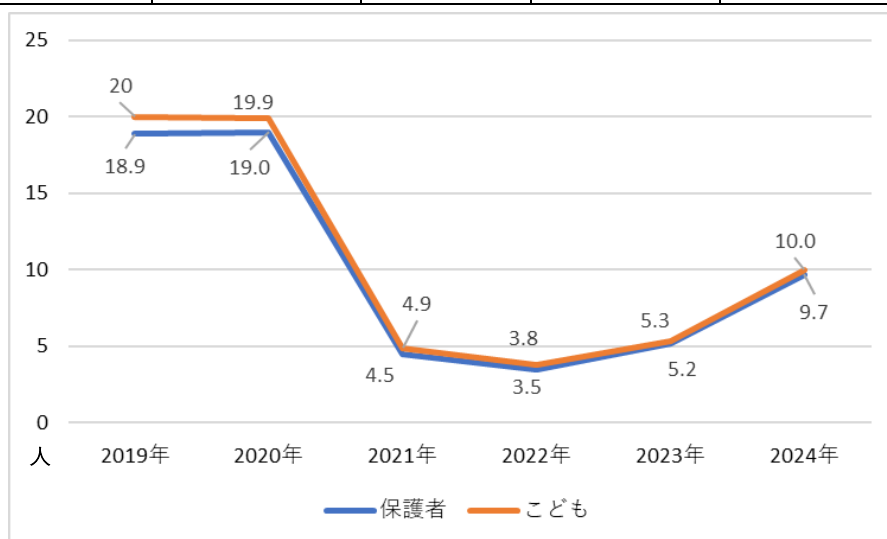


図 1 一日あたりの平均利用者数の推移 (2019～2024 年)

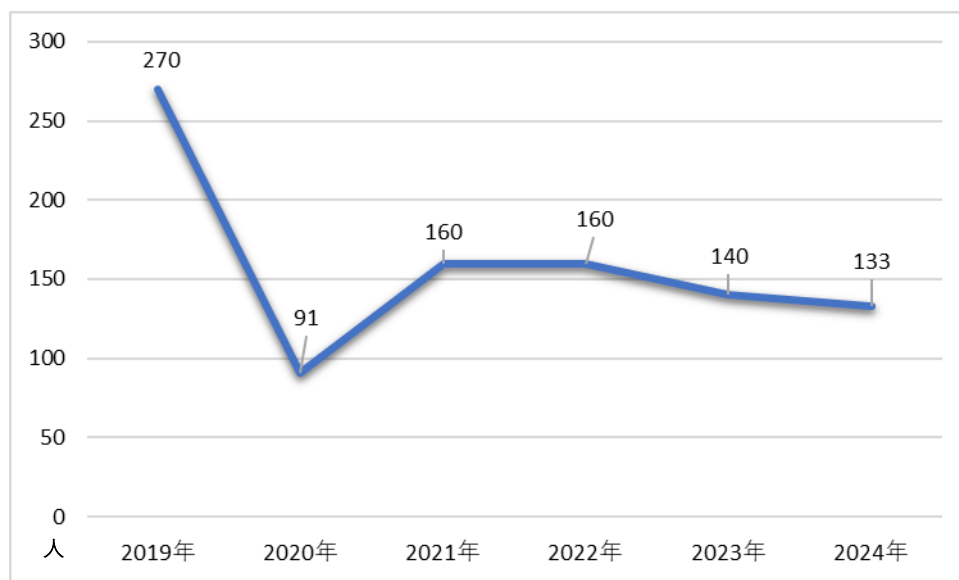


図 2 新規登録者数の推移(2019～2024 年)

保護者から保育士への相談は随時受け付けており、22 件の相談があった。保育園への入園に対する不安、離乳食の開始時期、夜泣きによる不眠、成長発達についての質問があり、保育士が都度相談に応じている。

学生の延べ参加者数は 65 名で、2024 年は学生の利用促進のための活動を行ったことで大幅な参加者数の増加がみられた。大学院の新生児乳幼児援助の授業では、乳幼児の発達観察や、乳幼児を育児する親の思いを理解するために、コラボカフェ利用者に一人 30 分程度話を聞いて助産師の役割について学び、親子との交流を深めていた。今年度はイベント時に学部の公衆衛生看護技術論の授業での学生参加があり、こどもの成長発達やイベント運営について学びを深めることができた。さらに、学部生がボランティアで授業の合間などに、コラボカフェに訪れ来所中の子どもと遊んだり、見守りを行ったりしている。

2) 教員と保育士が企画・運営したプログラム

2024 年度は、来所型イベントを 4 回開催した。

・「ベビーマッサージ」

野田まゆみ保健師（ベビーマッサージ：kokko）を講師にお招きし、コラボカフェにおいて、「ベビーマッサージ」のイベントを 2 回開催した。1 回目は、6 月 10 日に生後 8 か月～1 歳頃まで（ハイハイ可能）のこどもと保護者を対象とし、5 組 10 人が参加した。2 回目は、6 月 17 日に 1 歳～1 歳 6 か月頃まで（独り歩き可能）のこどもと保護者を対象とし、5 組 10 人が参加した。

野田講師よりベビーマッサージの方法、注意点などについての説明を受けた後、「リラックスのためのベビーマッサージ」「便秘と消化吸収のためのマッサージ」「足のマッサージ」「背中でのマッサージ」について、講師と一緒に実演を行った。参加者は熱心に講師の話を聞いて、子どもまたは人形でマッサージの練習を行った。「エビデンスに基づいた手技を丁寧に教えていただけて大変参考になり、家でも是非やりたい」「寝転がる姿勢がイヤになっ

てしまってから、どのようにマッサージしてあげればいいのか悩んでいた。抱っこしながらや、遊びの中でできる方法を教えていただいたので勉強になった」という感想をいただいた。当日は、各回に本学の保健師課程『公衆衛生看護技術論』の受講学生が 16 人ずつ参加した。参加学生にとって、月齢ごとの子どもの様子や発達、健康教育としての講座の運営などを学ぶことができた貴重な経験となった。

・「母乳と卒乳、離乳食の話」

8 月 23 日に、コラボカフェにおいて「授乳と卒乳、離乳食の話」についての講習会を開催し 18 組 36 人の親子が参加した。本学ウィメンズヘルス看護学分野教員の田中美紗助産師が授乳や卒乳の方法、離乳食の進め方などについての講義をした後、実際の離乳食や出汁をみせながら、出汁の取り方、出汁を用いた調理方法などについて説明を行った。当日は、本学大学院の助産師課程の学生も参加し、子どもの見守りを行いながら、健康教育としての講座の運営などを学ぶことができた。

参加者より「卒乳の仕方が分からなかったもので、色々な方法があると知れてよかった」「卒乳の進め方や具体的な方法が参考になった」「本に書いている通りに進まない。“こうあるべき”と思いきすぎなくてよいというお話で少し肩の力を抜こうと思えた」という感想が寄せられ、満足度の高いイベントとなった。

・「リトミック教室」



11 月 13 日にコラボカフェにおいて、「リトミック教室」のイベントを開催し、10：15～のひよこさんクラス（0～1 歳）に 10 組 20 人、11：00～のペンぎんさんクラス（1～1 歳半）に 9 組計 18 人の親子が参加した。講師の松本裕子先生（メロディーピアノ教室）から音階についてのお話や、多くの音楽に触れることの大切さなどについて教えていただいた。その後、「リズム合わせ」「滑り台遊び」「スカーフ遊び」などを音楽に合わせて、歌いながら行い、参加親子の笑顔がたえない楽しい時間となった。当日は太山寺中学校より 2 人の中学生がトライやるウィークの職業体験で、当日のイベントの準備や運営に参加した。

参加者から「音階を気にして手遊びなどしてみたことがなかったので、意識してみようと思った」「普段、ピアノを弾いてあげることができないので、メロディー、ハーモニーにふれて体を使って楽しめて良かった」などの感想が寄せられ、満足度が高くまた参加したいと好評であった。

・「子どもの靴選び」

2025 年 1 月 27 日に「こどもの靴選び」のイベントをコラボカフェにおいて開催し、14 組 30 人が参加した。椎野啓三講師（足と靴のプラウド：代表取締役・店長）からの「子どもの成長は足と靴で決まる！（6 歳までにできること）」の講義の後、お子さま一人ひとりの足のサイズを計測して、実際にお子さまが履いている靴をチェックし、買い替え時期や選び方等の助言をいただいた。

参加者より、「靴の選び方を具体的に教えてもらえてわかりやすかった」「1 人ずつ足と靴のチェックをしていただけたのがすごく嬉しかった」「これから靴を買うので参考になった」という感想が寄せられ、アンケートでは参加者全員が満足したと回答し好評を得た。



3) 保育士が企画・運営したプログラムについて

毎週木曜日の午前中に定期開催している「親子でふれあい遊び」や「製作遊び」などの保育士企画イベントは利用者に好評である。子どもたちに「豊かな遊びと体験」を提供する多様なプログラム（手遊び、パネルシアター、楽器遊び、ダンスなど）を通じて、利用者親子の触れ合いを深めるとともに、イベント参加がコミュニケーションの潤滑油となり利用者間相互の交流を促した。その他に、予約制の来所型の季節のイベントとして、7 月下旬から 8 月の木曜日午前中に熱中症対策等安全監理策を講じながら「水遊び」を実施した。また、7 月 4 日に七夕、10 月 31 日にハロウィンイベント、12 月 13 日には、クリスマス会、2 月 28 日にはひなまつりを開催した。保育士によるイベントは親子から人気が高く、受付開始後すぐに定員に達するなど人気が高く、利用者間の交流を盛り上げる場としても機能した。開催日における 1 日平均利用者数も高水準を示している（表 2）。



表 2 保育士イベント企画開催実績及び開催日の 1 日平均利用者数

イベント名	開催日・開催回数	1 日平均利用者数
親子でふれあい遊び	定期開催（毎週木曜日）年間 35 回	23.8
水遊び	7 月・8 月 計 13 回	22.5
サイリウム製作	6 月 11 日（火） 1 回	34.0
七夕まつり	7 月 4 日（木） 1 回	28.0
動物バルーン遊び	9 月 19 日（木） 1 回	32.0
ハロウィンイベント	10 月 31 日（木） 1 回	41.0
クリスマスリース作り	11 月 29 日（金） 1 回	25.0
クリスマス会	12 月 13 日（金） 1 回	36.0
おひな祭り	2 月 28 日（金） 1 回	28.0

4) 地域連携

西区役所保健福祉課の行政保健師や保育士と連携し、子育て支援に関する意見交換の機会を設けている。その中で利用者からの相談情報を共有し、子どもの成長・発達に関する相談を受けた気になる子どもがいる場合は専任保育士が担当教員に経過状況等を報告し、担当教員が保健師と連絡をとりながら、保健師への相談が適切と判断した場合は利用者に保健師を紹介する運営体制を敷いている。

11 月 13 日に、西区保健福祉部主催で開催された「子育て支援者連絡会」に担当教員 2 人と保育士 1 人が講師として参加し、「神戸市看護大学の子育て支援の活動について」のテーマで昨今の子育てを取り巻く環境の変化や、コラボカフェの活動内容を紹介した。また、参加した西区の子育てサークル運営者とのグループワークを通じて子育てにおける様々な課題を共有することができた。

3. 評価

1) 評価

今年度は、季節のイベントや外部講師招聘イベント開催時以外は人数制限や予約制を撤廃した。SNS での広報に加え、西区役所の保健師や保育士と連携して本学のコラボカフェの利用の促進を行ったことや、利用者の要望に応じた季節のイベントや製作・運動遊びを追加したことにより、利用者が増加したと考えられる。新規登録者数の減少は、日本全体の出生数の減少や、子育て世代の女性の就業率の増加、周辺地域における新規の子育て支援事業所の開設などの影響も考えられる。

2) 今後の課題

新型コロナウイルスの収束により、これまで午前と午後の 2 部制としていたが、次年度は 2 部制を廃止することで利用者にとって利用しやすい運営形態に変更し、利用状況进行评估する。ここ数年で利用者が低年齢化しており、0 歳～1 歳代のこどもが増えているため、月齢、年齢にあわせた遊びを安全な体制で提供し、安心して利用できる子育ての場の提供を継続する。イベントの開催内容や方法については、引き続き利用者の要望を聞きながらテーマを検討し、幅広いニーズにそえるように企画する。行政や地域の子育て支援者との連携の強化を目指し、子育て支援者連絡会などにも引き続き参加し、本学のコラボカフェが果たせる役割について検討する。

XII トライやるウィーク

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子

1. 概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校2年生が地域を学びの場に、体験を通して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人ひとりの興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動を5日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高め、自分なりの生き方を見つけることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

2. 実績

2024年度のトライやる・ウィークでは、6月に星陵台中学校から3名、11月に太山寺中学から2名の中学生（2年生）の受け入れを行い、いずれも3日間の日程で実施された。

星陵台中学校スケジュール

日程	内容
6月3日（月）	ガイダンス・キャリア支援室業務補助体験
	「在宅看護論」授業補助体験
6月4日（火）	キャリア支援室業務補助体験
	子育て支援事業「コラボカフェ」保育士業務補助
6月5日（水）	図書館事務業務体験
	「まちの保健室」イベントアンケート集計作業補助

体験者の感想（星陵台中学校）

- 今回のようなきっかけがないと大学に行く機会がなかった。看護大学のトライやる・ウィークで続いているというポスター作りをすることができて、楽しかった。大学の授業の手伝いで、学生の発表を聞いて発表方法の参考になった。
- これまで保育士さんは子供の面倒を見ているイメージだったが、子どもたちを楽しませるために裏ではいろいろと工夫して作業していて大変な仕事だと思った。生後5か月の子供を抱っこしたのもいい経験になった。



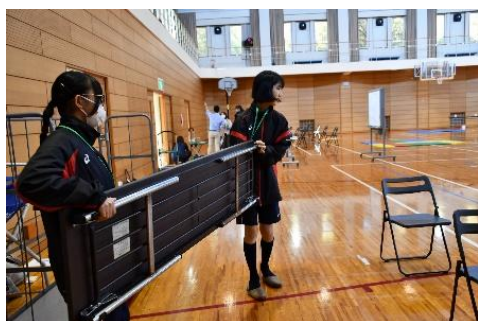
「キャリア支援室」授業補助体験より



「コラボカフェ」業務補助体験より

太山寺中学校スケジュール

日程	内容
11月6日（月）	ガイダンス・事務局作業補助・図書館事務業務体験
	「在宅看護学実習」業務補助体験
11月7日（火）	図書館事務業務体験 子育て支援事業「コラボカフェ」保育士業務補助
	キャリア支援室業務補助体験
11月8日（水）	「まちの保健室」イベント会場準業務補助
	子育て支援事業「コラボカフェ」イベント業務補助 アンケート集計作業補助



「在宅看護学実習」業務補助体験より



図書館事務業務体験より

体験者の感想（太山時中学校）

- 図書館では、学生や教職員のためにとても多くの図書の管理を時間をかけて努力していることがすごいと思った。大学の図書館では多くの蔵書を様々な面からサポートしているのを知って、学校の図書館でもそうしたサポートへの感謝を忘れずに利用したいと思った。
- これまで特に将来の夢とかなかったが、コラボカフェの子どもたちの触れ合いを通じて、自分が笑顔になれたり、子どもが喜んでくれる姿を見て、将来は保育の仕事に就きたいと思った。大学の使命である「教育・研究・地域貢献」の意味を理解できた。

X III 分野別の地域貢献活動

1. こうべ生涯学習カレッジ（コムスタ神戸）

人間科学領域 人文科学分野 城田純平

神戸市内にある 12 大学による大学連携セミナーとして、各大学の教員の様々な専門分野の講義が「こうべ生涯学習カレッジ」として市民に提供されてきており、本学も 2012 年から参加している。

今年度は、2025 年 1 月 20 日（月）13:30～15:00 に「人間と生命の尊厳を問い直す—哲学の立場から—」というテーマにて講義を行った。参加者は 70 名程度であった。構成としては、講師からのレクチャー 70 分に対して、参加者からの質疑応答 20 分程度であった。講義内容としては、序盤に、科学技術の飛躍的な進歩に伴い、私たち人間の生命や身体を操作することが技術的に可能になっている昨今、「人間の尊厳とは何か」、「生命の尊厳とは何か」という問いが、あらためて問い直される必要が生じてきていることを紹介した。その上で、西洋思想に由来するキリスト教的・個人主義的な価値観・倫理観においては、他の動物との区別を前提に人間の尊厳が考えられてきた一方で、日本の伝統的な考え方では、人間を特権視せずにむしろ人間を自然や生命の中の一部であるとみなす仕方で生命の尊厳が重視されてきたことをお話しし、現代の人間や生命をめぐる倫理的な問題は、大きく分けると、こうした二つの考え・価値観のコンフリクトとして整理できることをお伝えした。

その後、質疑応答を通して、日常生活との関わりについても補足的に検討し、その結果として、「自らや家族の終末期を想定した際に自然と自分が依拠していた価値観がどのようなものであったのかが分かったので、今後話し合う際の参考にしていきたい」、「紹介された本を読みながら社会的な問題としても考えていきたい」といった感想が寄せられるなど、参加者自身の日常生活をあらためて振り返ったり、あるいは、あるべき社会の姿について深く考えていったりするための話題提供を行うことができたように思う。

2. もの忘れ看護電話相談

老年看護学分野 坪井桂子、石橋信江、秋定真有、蒲谷苑子

「もの忘れ看護電話相談」は、認知症の人およびその家族が社会から孤立することなく、安心して自宅での生活を継続できることを目指し、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、2020 年度から取り組みを開始した活動である。

2024 年度の「もの忘れ看護電話相談」は、1 人 20 分の事前予約制として広報した。しかし、事前予約による相談件数は 0 件であり、対面によるもの忘れ看護相談の個別相談利用者の継続フォローとしての相談件数が 2 件であった。

昨年度と同様に、新型コロナウイルス感染症が 5 類へと移行し自粛生活が緩和したことから、事前予約による電話相談数は減少していると考えられる。しかしながら、これまでの相談者のニーズを考えると、相談者自身が利用しやすい相談の方法を選択できるメリットは大きい。また、今年度実施したように対面の個別相談利用者の継続的なフォローの手段として、電話相談は有効であったことから、次年度以降も利用者のニーズに合わせ電話相談を活用していきたいと考える。

3. 神戸市フレイルサポーターによるフレイルチェック事業

公衆衛生看護学分野 岩本里織、山下正、遠藤真澄、山田暢子

1) 概要

本事業は、神戸市（公益財団法人こうべ市民福祉振興協会に委託）がフレイルサポーター（市民）を育成し、フレイルサポーターが地域の中でフレイルのリスクがある高齢者を把握し、早期に予防活動を支援することにより、将来的に要介護状態に陥ることを予防する目的で開催している。本学では、神戸市と公衆衛生看護学分野が共同で開催しており、保健師課程の 4 年生が参加することで、「a. 地域住民の介護予防事業において、保健師による介護予防の事業・施策の立案、実施における関係機関との連携や調整、評価の役割を学ぶ」、「b. フレイル事業に参加・協働し、住民の主体的介護予防実施について学び、住民の主体的活動の推進のために保健師がどのような役割を担うかを考える」、「c. フレイル事業に参加した地域住民に対して、介護予防に関する相談を実施できる」の 3 点を目的としている。

2) 実績

2024 年 12 月 5 日、神戸市介護保険課、こうべ市民福祉振興協会、神戸市フレイルサポーターとの共催により開催した。今年度は 28 名と多くの神戸市民にご参加いただいた。

内容は、フレイル予防の講話、自己簡易チェック（サルコペニアの簡易指標である指輪つかテスト、栄養・運動・口腔・社会性・こころのチェック）、深堀チェック（口腔・運動・社会参加のフレイルチェック）、体力測定、結果説明であった。

実施後のアンケートでは、本事業に対しては「とても満足」あるいは「まあ満足」と回答したものは参加者の 92.9%（26 人）、学生の態度や声かけに対しては参加者の 96.4%（27 人）であり、参加者にとって満足できる内容であったと考えられる。また、今回が 2 回目以上の参加者が 35.7%（10 人）と 1/3 を占めており、継続して参加されている方が多い状況であった。

3) 教育上の効果

学生は、事前に神戸市介護保険課の保健師より講義を受け、神戸市の高齢者の現状と課題、介護予防事業・施策の立案、関係機関との連携や調整、効果検証等の保健師の役割について学んだ。

当日、学生は、フレイルサポーターとともに参加者の健康測定やフレイルチェック項目のサポート等に参加した。フレイルサポーターが自らの経験を踏まえながら参加者へ丁寧に接する様子から、参加者に寄り添う姿勢や、参加者に前向きになってもらえる声かけの仕方を学んでいた。また、健康相談では、学生は今までの実習等で培った看護の知識を活かし、参加者の健康状態や生活状況を踏まえて真摯に対応していた。そのため、参加者の満足度は高く、学生は事業を通して、看護職として自信を持つことにつながっていた。

また、学生は、計画、実施、評価までの一連の過程を通じて、フレイルサポーター個々の専門性や経験を尊重しながら主体的な活動を促し、フレイルサポーターを組織として支援する保健師の役割についても学ぶことができた。さらに、学生は、フレイルサポーターが役割を持って、地域の健康づくり活動を主体的に実施することが、自らの健康や生きがいにつながっていることを学んでいた。

以上のことから、学生は多くの視点で学びを得て、本事業の3つの目的を達成した。

4. プレパパプレママセミナー

ウィメンズヘルス看護学助産学分野 高田昌代 井上理絵 池田智子
子安恵子 田中美紗

1) 概要

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環として実施している。セミナーの目的は、神戸市の地域住民（妊婦とそのパートナー）に妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高められるような、集団指導の実践的技術を助産学実践コースの学生が習得することである。

2) 実績

今年度は第1回目を2024年9月7日（土）、第2回目を2025年2月15日（土）に開催した。第1回目のテーマは「赤ちゃんとのつながりと、身体の変化を感じる」として、大学院2年生が中心となり、大学院1年生、研究科生、学部学生とともに実施した。16組の参加者からは「まだ出産に対して実感がわいていなかったけど、色々知ることができ不安より楽しみが増えた」「沐浴の仕方を学べたり妊婦体験をしたり普段経験することのできないことが出来てよかった」「夫と一緒に体験する機会が今までなかったので楽しく過ごせた」など、体験を通して実感できる対面セミナーの良さが感じられる意見が寄せられた。第2回目のテーマは「みんなで築くこころに残るお産」として、大学院1年生が中心となり開催した。16組の参加があり、参加者からは、「劇などもあり実際のお産のイメージができたのでとてもよかった」と概ね好評であった。この2回のセミナーは妊婦への出産・

育児準備教育の場として活用いただいた。

3) 教育上の効果

各セミナーの目的・目標、テーマについては、院生が授業で学んだ健康教育の手法と、助産学実習で妊産褥婦の援助を通じて考えたことである。特に妊婦の求めるニーズは何かに焦点を当て内容を熟考した。そのため、院生同士で意見交換を十分に行い、一貫性のある内容に構成することで、全員が同じ方向を向いて実践・評価まで行うことができ、集団教育の実践的技術を習得することにつながった。

5. 命の出前講座

ウィメンズヘルス看護学分野 井上理絵

1) 概要

命の出前講座は、思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動として始まった。本学近辺にある小寺小学校 4 年生、5 年生の児童を対象に大学院助産学実践コースの学生が「思春期健康教育論」の授業の一環として毎年実施している。

2) 活動内容

① 4 年生への健康教育

- a) 実施日 2024 年 10 月 17 日
- b) 対 象 4 年生 57 人
- c) 内 容

今回の授業は、思春期に起こる二次性徴の仕組みを知り、自分のこころとからだを大切に思うことができることを目標に授業計画を立てた。実施は、大学院 2 年生が中心となり、大学院 1 年生、学部生も一緒に行った。まず、身体に関連するクイズで導入したのち、体の成長や男女の体の変化についてクイズを交えた講義形式で授業を進めた。その後、月経時の対処について、男女混合の小グループに分かれて演習を行った。小学生たちは、大学院生が話す内容に興味深くうなずくような反応であった。特に女子からはナプキンを当てる演習について「トイレで替えるのは難しそうと思ったけれど、自分が月経になった時にやってみたい」という感想があり、月経に対する準備となる授業になった。男子は「男女で成長が違うことが知れた」「精通のことが知れてよかった」など体の変化に関する感想があり、自分たちの変化や男女の違いを自覚するきっかけとなった。

② 5 年生への健康教育

- a) 実施日 2024 年 10 月 24 日
- b) 対 象 5 年生 62 人
- c) 内 容

二次性徴を経験する、または、していることを通じて、人として変化する自分や他の

人の身体や命の大切さを考える機会をもつことを目的に毎年授業を実施している。まず、自分が成長して現在に至っていることから始め、遡って成長を振り返るような授業を組み立てた。担当教員が子宮内での胎児の発育を説明し、胎内での成長の時期によって耳が聞こえ、心臓が動く説明をした。胎児心音は実際の音を聞いてもらい臨場感を出した。その後、大学院 1，2 年生による分娩の劇を実施した。分娩が 10 時間以上かかることに小学生は驚き、自分たちが長い時間かかってお腹の中で成長したことについて「すごい」と話していた。授業後の感想には、「10 時間以上かけて生れてくるなんて、お母さんすごい！」「お母さんにあらためて感謝しようと思った」など感謝の気持ちを表現していた。

3) 活動の成果

小学生は、精通や月経の対処に対して不安も持っていたが、大学院生が授業を行うことで楽しんで受講することができ、性や成長に対する肯定的な捉えができるようになっていた。また、大学院生は、小学生の授業を立案・実施することで対象理解の重要性が鮮明となり、対象に応じた授業方法の工夫が必要であることに目を向け実践できていた。

4) 今後の課題

小学生 4，5 年生に向けた命の授業は、自分の成長・変化について知る重要な授業である。今後も引き続きわかりやすい授業展開を考えたい。本授業はプレコンセプションケアの一環となるため、小学校と連携をしながら継続することが涵養と考えている。

6. 竹の台ふれあいまつり

ウィメンズヘルス看護学助産学分野 高田昌代 井上理絵 池田智子
子安恵子 田中美紗

1) 概要

竹の台ふれあいまつりは、神戸市西区竹の台地域委員会が地域住民の一体化を願って住民主体で開催されているお祭りである。ウィメンズヘルス看護学分野は毎年参加をしており、参加目的は、地域の様々な世代の方と触れ合うことで世代に応じた健康課題について学びを深めることである。参加にあたり、全国助産師教育協議会からの協力依頼を受け、助産学実践コースの院生がオレンジリボン運動（子ども虐待防止）について学び、社会への啓発活動の企画・実施も取り入れている。

2) 実績

今年度は 2024 年 11 月 10 日（日）に竹の台小学校で開催された。助産学実践コースの院生 5 名が中心となり「赤ちゃん人形抱っこ体験」「赤ちゃんの体重測定」「体組成測定」を企画、実施した。神戸市看護大学のコーナーに参加された方は 100 名を越えた。「赤ちゃんの体重測定」は 4 名、「赤ちゃん人形抱っこ体験」は 62 名で様々な年代の方

が抱っこを体験され地域住民との交流の場となっていた。「体組成測定」の参加者は 80 名で、測定後に院生から測定結果の説明と共に、参加者からのご質問やご相談にも応じた。

3) 教育上の効果

参加者は幅広い年代の方々であり、院生は発達段階上の健康課題について参加者との交流を通して理解する機会を得ることができた。「体組成測定」では、測定後に個別の説明や相談を実施したことで、参加者のニーズや生活者としての視点を考慮した健康支援の実践力習得につながっていた。オレンジリボン運動の企画・実施により、虐待のない社会の実現のために、この運動をより多くの人々に広げる必要性を再認識する貴重な機会となった。

XIV コラボ教育

在宅看護学分野 丸尾智実
(教務委員会担当委員)

1. 概要

教育ボランティアとのコラボ教育について、2023 年度までは本センターの地域連携グループが中心的役割を担ってきたが、2024 年度のセンターの再編成に伴い、本事業が本学の教育にかかわる重要な位置づけであることから、本学の委員会である教務委員会が中心的役割を担うことに変更された。

しかし、教育ボランティアとのコラボ教育は、センターの様々なグループ活動とも深く関連していることから、今年度の活動の成果を本報告書に掲載する。

2. 内容

(1) 教育ボランティア登録状況

毎年 4 月に、前年度の教育ボランティアとして登録していただいた方に教育ボランティア継続の意思確認をおこなっている。2024 年度の教育ボランティア登録者は 72 人であった。

(2) 教育ボランティア導入授業

2024 年度に実施した教育ボランティア導入授業は、1 年生科目では「看護技術入門」「多職種連携I」「基礎看護技術演習 I」、2 年生科目では「フィジカルアセスメント」「老年健康生活支援論」「慢性看護論」、3 年生科目では「災害看護論」「健康学習論」「在宅療養支援論 I」の 9 科目と、神戸市西区 15 地区、須磨区 5 地区で実施している 1・2 年生が同時期に実習をおこなう「地元創成看護学実習Ia」「地元創成看護学実習II」（これらの実習科目は、各地区で学生の教育を担っていただくことから、実習ボランティアとして教育ボランティアとは別に登録をいただいている）の実習 2 科目、合計 11 科目であった。

(3) 教育ボランティア導入授業の学生評価

法人中期計画の中で、「教育ボランティアの方々との連携をさらに強化し、学生と地域住民とのコラボ教育を推進する」ことを掲げていることから、教育ボランティア導入授業を受けた学生による「コラボ教育学生評価」を実施し、教育ボランティアニュースレター等でその結果を報告している。

2024 年度は、実習科目を除く 9 科目、延べ 410 人が回答した結果を以下の通りまとめて報告する。

※円グラフの凡例

黄緑：「とてもそう思う」と回答した者

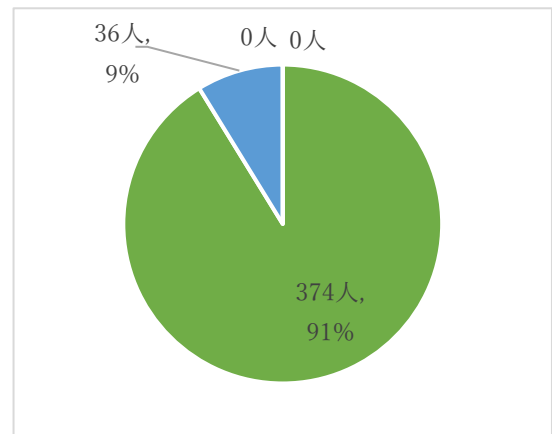
青：「まあまあそう思う」と回答した者

黄：「あまりそう思わない」と回答した者

緑：「全くそう思わない」と回答した者

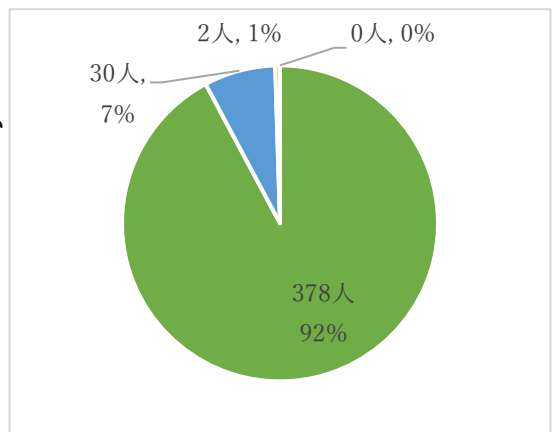
【設問 1】

教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
いつもよりことば使いや態度に気を付けましたか



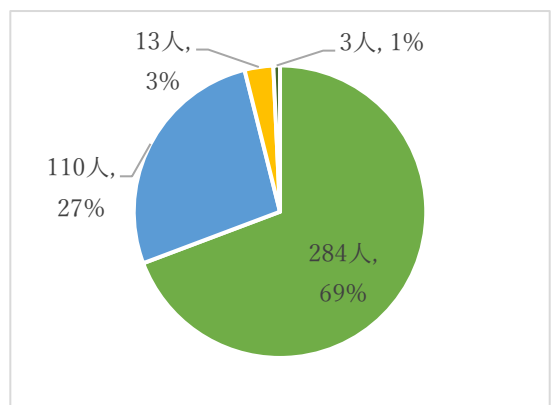
【設問 2】

教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
いつもより良い意味で緊張して授業に臨めましたか



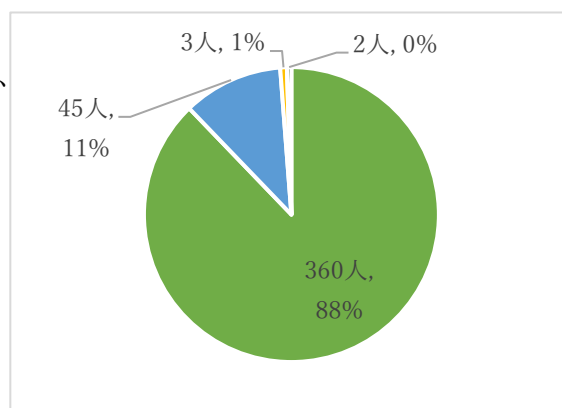
【設問 3】

教育ボランティアさんが授業に参加されることで、
地域で生活する人々の理解がより深まりましたか



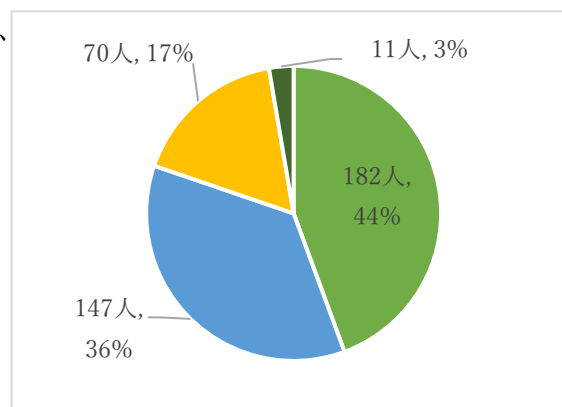
【設問 4】

教育ボランティアさんが授業に参加されることで、看護を提供する人々をケアする際に心がけることについての理解が深まりましたか



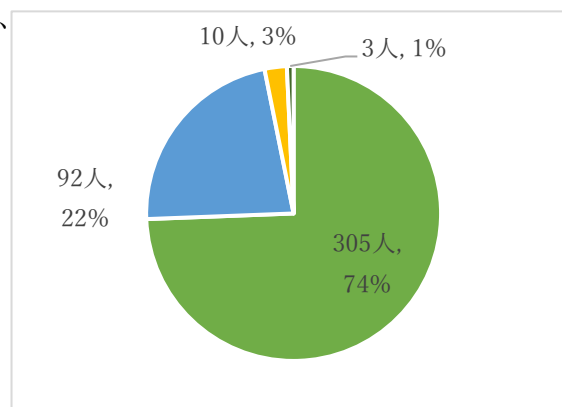
【設問 5】

教育ボランティアさんが授業に参加されることで、大学や自宅近隣における地域のイベントに参加してみようという気持ちが膨らみましたか



【設問 6】

教育ボランティアさんの講演や意見、感想により、看護職を目指すモチベーションがあがりましたか



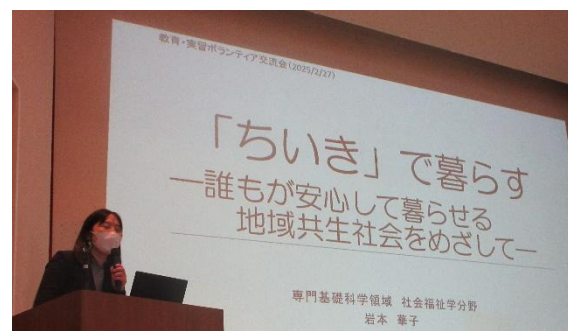
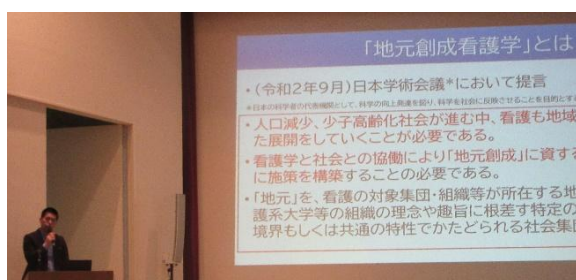
（４）教育・実習ボランティア交流会

2023 年度までは「教育ボランティア交流会」という名称で交流会を実施していたが、2022 年度よりカリキュラムの改正に伴って開始した地元創成看護学実習に、これまで以上に実習ボランティアの皆様にも本学の教育・その他の活動に多大なご協力をいただいていることから、今年度より「教育・実習ボランティア交流会」と名称を変更して開催することとなった。

2024 年度の教育・実習ボランティア交流会は、2025 年 2 月 27 日（木）10 時 30 分から 12 時 00 分に本学ホールで実施した。教育ボランティア 31 人、実習ボランティア 9 人、教

職員 30 人、学生 3 人の計 73 人が参加した。

交流会では、2024 年度に教育・実習ボランティアにご協力いただいた授業および実習である「慢性看護論」「地元創成看護学実習」の担当教員より授業・実習の概要と学生の学びについて報告した後、1、3、4 年生の学生が、コラボ教育を通して自身の学習意欲や看護観、進路にどのように影響しているかについて発表した。また、岩本華子准教授が『「ちいき」で暮らすー誰もが安心して暮らせる地域共生社会をめざしてー』というテーマでミニ講演をおこなった。その後の質疑応答では、教育・実習ボランティアより、学生との関わりが自身や地域の人々に良い影響を与えていることや講演内容で自分の地域について考えることができた等の意見が述べられた。



写真：教育・実習ボランティア交流会の様子

5) 教育ボランティアニュースレター

毎年、教育ボランティアの方々に関連した話題を掲載した、教育ボランティアニュース

レターを不定期で発行している。2024 年度は 2025 年の 2 月と 3 月に、第 33 号と第 34 号の計 2 回発行した。内容は、第 33 号では学生によるコラボ教育学生評価アンケートの各科目の自由記載の内容を抜粋したものを、第 34 号では教育・実習ボランティア交流会の開催概要とした。

新しい働き方がよくわかって、新しい仕事を希望する者も出てきました。
教育ボランティアの経験のおかげでは、かなりありまさんで済みました。
【教育ボランティアニュースター】の第33号ができましたので、お届けいたします！

発行：神戸市看護大学
発行所：社会福祉会

教育ボランティアニュースター

第33号
発行月 2025年2月

2024年度 学生アンケート・自由記載内容の報告

2024年度教育ボランティア専任授業では、

1年生科目では「看護技術入門」、「多職種連携1」、「基礎看護技術演習1」、
2年生科目では「フィジカルアセスメント」、「老年健康生活支援」、「慢病看護論」、
3年生科目では「災害看護」、「在宅看護論」、「健康学習論」の合計科目で、
教育ボランティアの皆様に「協力いただきました」。

今年度は、学生アンケートの自由記載内容を随時紹介して報告させていただきます。

次年度も引き続きご指摘いただきまますよう何卒よろしくお願いいたします！

1年生授業

看護技術入門

「実際に物触る世代の違う方とお話しし、演習を行う中で、力の入れ方、話し方など普段では気づかなかったところにも意識が気づいて気づかなくなりました。」「自分自身でもかかれたら」とボランティアさんで「頑張って」ってできたのに、実際に触ると、たかさんの人を変えることが意識していかないと強く思った。

多職種連携1

・インタビューでは、質問内容も学部によって見方が異なることが学べた。入院生活の中で患者さんに対するケアを考える上で自分の軸にするのではなく、患者自身の思いに耳を傾けることが大切だと気がついた。

・インタビューを通して、看護職に視点がある人の興味深かった。多職種チームを形成し、機能を共有することで患者さんに合った治療を提供できることがわかった。

基礎看護技術演習1

・ボランティアさん自身が看護を感じていることを言ってくれと言われて、目標のない患者をおかすだけでなく伝えてくれる方もいるように感じることがある。実際の現場でも患者さん自身が感じていることを伝えてくれることと自分自身で感じることを身につける必要があると感じた。

・演習が終わったあとにボランティアさんが「気持ちよかった」とおっしゃっていて、自分たちの技術はまだまだ改善点はあるけれどもできたのだと知って自信が持てた。

2年生授業

フィジカルアセスメント

・学生以外を対象にアセスメントは緊張するが、ボランティアさんからの貴重な意見がみんなにも学習に繋がると思っていてた。とても有意義な時間だった。
・年がら不安そうに話をすると思えるさんが安心して話せることを改めて感じたことができた。説明する知識を身につけられるように頑張りたいと思った。

老年健康生活支援論

・授業を受けて、認知症は命の危険もあるのだと認識が変わった。ボランティアさんの経験やその時感じたこと、学んだことを書くことができてとても勉強になった。
・教育ボランティアも積極的に地域活動に参加することで生き生きとされているのを、地域へ向かう意識がわいた。

慢性看護論

・病を抱えながらもいきいきとされていて、慢性病への考えが変わった。
・お話を聞いて看護を考えるときには、対象者さんの生活に「最大関心」したいと思った。

3年生授業

災害看護論

・震災の当時を経験した方の話にテレビや本よりリアルな体験があり、とても貴重な体験になった。家が壊れり、ライフラインがまわらなくなることで何が被災したのか、それがなくとも違う形で被災している方がいることを知ることができた。

・将来看護士をしていることに被災で大きな事故が起きたらどうするべきか、具体的に考えることができた。訓練の重要性を知り、もっと真剣に取り組みたいと思った。

在宅医療支援論1

・介護をしている方の話はあまり聞いたことがなかった。ご家族がどのような思いや不安、悩みを持って介護をされているのかをすべてでも貴重な機会があった。

・実際に介護をしている方から話を聞くことで、医療者が介護の変化に気づくきっかけ、介護者を1人にならなくて負担を減らすことができないという考えに変わった。将来看護士として在宅医療と関わることは介護者だけでなく、介護者の様子を察し、変化に応じて早く気づく介護者も必要だと看護観がなりたいたと思った。

健康学習論

・ボランティアさんにも伝える体験を通して健康意識の知識の整理ができ視野が広がった。
・グループや先生同士だけで気づかなかったことも、ボランティアさんの意見を聞くことで、もっとこの視点から人を見ればいろいろと看護観がなりたいたと思った。

発行：神戸市職業大学
教育委員会

朝の雪がほころぶ時期になりました。教育ボランティアの皆様にも
おかれましては、お変わりありませんでしょうか。
『教育ボランティアニュースレター』の第34号ができましたので、
お届けいたします！

教育ボランティアニュースレター

第34号

発行月 2025年3月

2024年度 教育・実習ボランティア交流会を開催しました！

2025年2月27日（木）10：30～12：00に、本学のホールで教育・実習ボランティア交流会を開催しました。昨年度より、本学でおこなっている教育ボランティア導入授業にご協力いただいている教育ボランティアの皆様と、地元創成看護学実習ⅠおよびⅡの科目で協力いただいている西區15地区、須磨區5地区にお住まいの実習ボランティアの皆様（上記地区で行う実習にご協力いただいている皆様）にご参加いただいております。今年度はボランティアの皆様40名、学生3名、教職員30名の合計73名が集う交流会となりました。

交流会では、本学学生・事務局長からの挨拶、教員と学生からの今年度の教育ボランティア導入授業の報告や学びについての発表、社会福祉分野実習教員による講演をおこないました。また、ご参加いただいた皆様からご意見もいただきました。

教育・実習ボランティア交流会は、毎年1回おこなう予定です。また、次年度の交流会で、皆様とお会いできることを楽しみにしております！



学長・事務局長挨拶



教員による授業報告



1・3・4年生からの
学びの発表



「おいしい」で暮らし
「おいしい」で暮らし
「おいしい」で暮らし



熱心に聞いていただき
ご意見をいただきました！



社会福祉分野実習教員による講演

「おいしい」で暮らし

—誰もが安心して暮らせる地域共生社会をめざして—



業績一覽

いちかんダイバーシティ看護開発センター関連研究業績一覧

(2024 年度)

論文

- (1) 水川真理子, 岩本里織, 磯濱亜矢子, 勝田玲子, 山下正, 遠藤真澄, 坪井桂子, 船越明子, 片倉直子, 小山富美子 (2024): 神戸市看護大学の健康づくり活動の 住民の周知・利用状況の実態と大学への期待 ―大学所在地区の全戸住民の 2021 年調査から―. 神戸市看護大学紀要 28, 15-24.
- (2) 岩本里織, 水川真理子, 南裕子 (2024): 看護大学教員らによる新型コロナウイルス感染症関連業務への 支援の実態と課題―神戸市看護大学の調査結果から―. 神戸市看護大学紀要 28, 33-42.

学会発表

- (1) 角田響介, 船越明子, 関口瑛里, 田中晴佳, 坂口豊代, 山岡由実 (2024): こころと身体
の看護相談における特徴的なケア内容. 日本精神保健看護学会第 34 回学術集会,
千葉, 2024 年 6 月
- (2) 畑中あかね, 池田清子, 野沢裕子, 中川美佐, 永瀬沙奈衣, 桑原京子 (2024): まち保
でフットケア健康教育を行う看護師を育成するプログラムの作成. 第 5 回日本フッ
トケア・足病医学会学術集会, 神戸, 2024 年 11 月
- (3) 水川真理子, 谷知子, 畑中あかね, 片倉直子 (2025): 心不全増悪予防オンラインナー
シング疾病管理プログラムの介入と効果. 第 89 回日本循環器学会学術集会, 横浜,
2025 年 3 月

メディア・報道

- (1) コラボカフェ 親子でふれあい遊び. ビバ! ニュータウン 2024 年 5 月 8 日号
vol834 NPO 法人 ビバ・ニュータウン発行
- (2) サンテレビ NEWS 神戸で「世界災害看護学会」 阪神淡路大震災から 30 年を前に
2024 年 11 月 29 日 <https://www.sun-tv.co.jp/suntvnews/news/2024/11/29/83266/>
- (3) サンテレビ NEWS 神戸で地域防災セミナー 避難所運営などの課題を共有
2025 年 2 月 26 日 <https://www.sun-tv.co.jp/suntvnews/news/2025/02/26/85408/>



センターの組織

2024 年度いちかんダイバーシティ看護開発センター組織

センター長 岩本 里織
副センター長 片倉 直子

まちの保健室グループ

	氏 名	所 属
リーダー	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	神原 咲子	基盤看護学領域 災害看護・国際看護学分野
	秋定 真有	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	石関 美津子	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	角田 響介	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	山田 暢子	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	山本 陽子	療養生活看護学領域 小児看護学分野

防災減災支援グループ

	氏 名	所 属
リーダー	神原 咲子	基盤看護学領域 災害看護・国際看護学分野
	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	池田 智子	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	岩本 華子	専門基礎科学領域 社会福祉学
	藤永 竜太郎	専門基礎科学領域 医科学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	藤本 佳子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	後藤 由紀子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

在宅ケア支援グループ

	氏 名	所 属
リーダー	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	船越 明子	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	大瓦 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	中川 恵津子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野

オンライン看護相談グループ

	氏 名	所 属
リーダー	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	坪井 桂子	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	林 千冬	基盤看護学領域 看護管理学分野
	井上 理絵	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	藤本 佳子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	関口 瑛里	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	山田 暢子	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野

オンライン慢性疾患看護グループ

	氏 名	所 属
リーダー	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	谷 知子	専門基礎科学領域 医科学分野
	石橋 信江	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

リカレント/臨床連携グループ

	氏 名	所 属
リーダー	二宮 啓子	療養生活看護学領域 小児看護学分野
	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	澁谷 幸	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	内山 孝子	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	石橋 信江	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	高山 良子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	新澤 由佳	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	岩井 詠美	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	後藤 由紀子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	佐藤 智夫	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	山本 陽子	療養生活看護学領域 小児看護学分野

保健師キャリア支援センターグループ

	氏 名	所 属
リーダー	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	藤本 佳子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野
	山田 暢子	健康生活看護学領域 公衆衛生看護学分野

フットケアグループ

	氏 名	所 属
リーダー	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

国際交流グループ

	氏 名	所 属
リーダー	神原 咲子	基盤看護学領域 災害看護・国際看護学分野
	森山 美香	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	高木 廣文	神戸市看護大学 特任教員
	林 千冬	基盤看護学領域 看護管理学分野
	山内 理恵	人間科学領域 言語科学分野
	井上 理絵	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	神谷 訓康	専門基礎科学領域 健康科学分野
	クロスビ アダム	人間科学領域 言語科学分野
	佐藤 隆平	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	城田 純平	人間科学領域 人文科学分野
	田中 晴佳	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	藤本 佳子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	樋口 佳耶	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター

2024 年度実績報告書

発行日	2025 年 7 月 1 日
発行者	公立大学法人 神戸市看護大学 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4 TEL 078-794-8080 FAX 078-794-8086
編集	神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター
表紙デザイン	手島美華
ISBN	978-4-9909462-6-5

©公立大学法人神戸市看護大学 無断転載を禁じます。

